

# 中日大辞典

愛知大学中日大辞典編纂所編



資料による

## 中日大辞典編纂所の歴史

今泉潤太郎 著



愛知大学中日大辞典編纂所

---

# 資料による中日大辞典編纂所の歴史

---

今泉潤太郎

---

❖目次❖

まえがき	2
1 はじめに	5
2 カードの返還依頼	14
3 編纂処の開設	24
4 編集経過	30
5 自費出版	38
6 訪中学術代表団	45
7 中国との絆	54
8 第二版、第三版ほか	66
あとがき	81

東亜同文書院 8  
華語研究室 10  
執筆基準と凡例 27  
印刷と製本 33  
辞典刊行会 35  
編纂処の解散 49  
郭沫若氏 56  
鄭振鐸氏 57  
馮乃超氏 61  
李何林氏 63  
編纂所の諸活動 72

◆—まえがき

中日大辞典編纂所はこれまで数度の移転をおこなったが、その都度、なにかの資料の遺失を免れなかった。せめて残された資料を整理、記録しておくことが急務と思い、表題の文章を『日中語彙研究』創刊号(二〇二二年)〜十二号(二〇二三年)に連載した。

この度、ブックレットとしてまとめるにあたり大幅に書き改めたが、各章に掲げた資料は『日中語彙研究』連載時の資料番号のまま、デジタルデータをウェブサイトに公開している。巻末奥付の上部に掲載したQRコードよりアクセスして閲覧できるので、ご参照いただきたい。



近衛篤磨 根津 一  
初代東亜同文会会長 初代東亜同文書院院長  
(愛知大学東亜同文書院大学記念センター提供)



東亜同文書院 虹橋路校舎 上海  
(1920年代)  
(愛知大学東亜同文書院大学記念センター提供)



東亜同文書院の華語授業  
(1920年代)  
(愛知大学東亜同文書院大学記念センター提供)



東亜同文書院の華語教科書  
『華語萃編』初集～四集  
(愛知大学東亜同文書院大学記念センター提供)



愛知大学華日辞典編纂処 豊橋  
(1955年3月)



返還された華語辞典原稿カードの点検  
(1954年11月)



# 1

## ◆ はじめに

中国から返還された旧東亜同文書院華語研究会作製の華語辞典原稿カードを基礎として中国語辞典を編纂すべく、昭和三十年（一九五五）に愛知大学華日辞典編纂処（現在の中日大辞典編纂所）が設置された。愛知大学は戦後上海から引き揚げてきた東亜同文書院大学の教職員・学生等を中心として創設されたことから、前身である同文書院の華語辞典編纂を引き継いだものといえる。

敗戦の際に、中華民国政府（通称、国民政府）により敵産として接収された、この辞典カードの行方に注意を払う者もいなかった頃、これに着目し、返還をいち早く提起し実現させたのが、同文書院大学最後の学長であり愛知大学の創始者である本間喜一名誉学長である。本間は廃校となった同文書院の責任者としての責務を果たすべく、何よりも先ず同文書院の教職員・学生のために新たな大学をつくった。同様に同文書院の華語辞典編纂事業の完成もまた己の責務とし、辞典カードの返還を実現させ『中日大辞典』を刊行した。

中国大陆では一九四九年十月中華人民共和国から新たに中華人民共和国へとかわったが、日本は新中国と国交を結ばなかった。当時、国交回復と、友好交流を願う人々は日本中国友好協会（以下、日中友好協会）を設立した。発起人として参加した本間は、協会理事長の内山完造うちやまかんぞうに辞典カード返還について相談し、その協力を取り付けた。本間は事前に中国語教授の鈴木擇郎すずきたくろうの同意を得ていた。同文書院の華語教授としてカードの作製開始から敗戦時接収の立会いまで、一貫して辞典編纂の責任者であった鈴木にとり、二十二年ぶりの辞典編纂の開始を意味した。引き揚げの際には、同文書院の学籍簿と成績簿を本間の指示で日本に持ち帰った。本間の信頼も厚く、共に愛知大学の創設に参加した鈴木であり、本間の思いを共有していた。この辞典の編纂に伴う困難を中国語専門家として、また編纂者として十分自覚していたが、辞典カード接収の際の無念な想いは払拭されず、本間の熱意に応じた。

昭和二十九年（一九五四）末、返還された辞典原稿カードが愛知大学に到着した。

中国語辞典編纂は、無一物から出発し財政基盤もなく経営難に苦しんでいた創設期の愛知大学にとり歓迎されるものではなかった。本間が編纂事業の意義を縷々説明した結果、大学評議会は大学財政に負担を与えない範囲内との条件で、華日辞典刊行会と辞典編纂処の設置を承認し辞典の編纂が開始された。以来、十三年の日時を費やし昭和四十三年（一九六八）に『中日大辞典』が刊行された。同文書院が始めた華語辞典編纂計画を愛知大学が引き継ぎ、完成させた大事業である。

我国初の本格的中国語辞典として好評を博し、昭和六十一年（一九八六）に増訂版、翌年に増訂第二版が刊行され、初版、第二版ともに数次の増刷りを重ねた。平成二十二年（二〇一〇）には第三版を出し現

在に至っている。各版とも大学創立周年記念事業の一つとして出版されたものである。

愛知大学にとり『中日大辞典』の持つ意義は単に一中国語辞典の編集・出版に留まらず、中国との学术交流の発展に寄与した点にある。出版を記念して寄贈された『中日大辞典』は中国で広く使用された。愛知大学の知名度を高めた点でこれに勝るものはないであろう。

中国では一九六〇年代に入るとソ連との関係が友好から敵対へと一変し、各大学の外国語教育もロシア語は英語・日本語へと切り替えられた。日本語学習者が急増した時期に合わせたかの如く、贈呈された辞典の初版一千二百冊は、中国日本友好協会（以下、中日友好協会）から全国各地の大学等の日本語教育・日本研究機関や協会支部等の対日関係部門に配布された。中国で日本語を必要とする場所は限定されていたので、誇張して言えば全中国に行き渡ったのである。

当時、中国は主に外国書籍の復刻版を内部交流と称して外文書店に限って販売できる仕組みを採っていた。『中日大辞典』も復刻版が出た。一般の中国人は復刻版を購入するが、かなり高価で、たやすく買うわけにはいかなかった。この発行部数は不明であるが、原本と合わせて相当数が中国内で使われていることは間違いない。日本人が中国（語）を理解するために編集された『中日大辞典』は、中国人にとって日本（語）を知るための辞典として利用された。この辞典が日本語を学び、教える中国人に与えた印象は極めて大きく、同時に辞典を出した愛知大学の名もまた広く知られることとなった。このほか欧米の中国学専攻を置く二十数大学の研究所・図書館にも辞典各版が所蔵され、愛知大学の存在が広く認知された。

愛知大学は戦前海外にあった日本の高等教育機関のなかで最も長い歴史をもつ東亜同文書院大学（東亜



同文会経営)をその前身としている。敗戦により同文書院大学は廃校となり、上海から引き揚げてきた同校の教職員・学生等を中心に昭和二十一年(一九四六)愛知県豊橋市に設立された。最後の学長として中華民国政府側と廃校処理をおこなった後、全員を連れ無事に帰国した本間喜一は、東亜同文会が解散となり同文書院大学の再建はもはや不可能と解った五月の時点から決然と新大学設立活動を展開し、同年八月には文部省の設置認可を得て、十一月十五日に新大学設立を実現させた。

新大学の設立は先ず何より同文書院の学生・教職員のために必要であった。敗戦後の日本はGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)から出される矢継ぎ早の指示により国家の根幹から変換を強いられた。東亜同文会・同文書院も当時GHQから最も否定され忌避される存在の一つであったので、当初、新大学で採用予定であった同文書院の教授数名は就任を阻止された。しかし世間の同情と支援を受け、文部省の了解を得て、わずか半年内で新大学を設立することができた。

#### ◆ 東亜同文書院

東亜同文書院を経営したのは東亜同文会で、校名もこれに由来する。この団体は日清戦争後の明治三十一年(一八九八)、東亜会と同文会が合体したもので、初代会長は近衛篤磨このえあつまるである。彼は日清戦争後、日本人とくに在華日本人が、西欧人と同様な態度を以って中国人に対して、これは後世に大きな禍根を残すこととなるから、日本人はよくその態度を慎み、中国問題も実相を研究し、百年の大計を定めるべき

である、いま一番必要なのは中国問題を研究し教育することにあると考えた。当時、欧米列強のアジア政策、とりわけロシアの南進に対して強い危機感を抱き、「東洋人の東洋」というアジア主義の姿勢を明確にして清国との提携を主張した。近衛は己の主張と計画を清朝高官らに説き、その賛同と支持をとりつけ、明治三十三年（一九〇〇）南京同文書院を開設した。しかし義和団事件により翌年に上海へ移り東亜同文書院と改称した。一方、東京に東京同文書院を開設し清国の留学生を受け入れた。

東亜同文会は広く全国から学生を募集するため各府県知事宛に官費給費生派遣の要望書を出したが、そのなかで同文書院は全寮制で、日本学生には華語（中国学生には日本語）と英語を教え、生産工業などの学術と法律経済などの知識を授け、傍ら（中国）内地旅行を奨励して、実地練習をおこない、世間に活用できる人材を育成すると述べている。

近衛の考えに共鳴し、これらを自ら実践したのが東亜同文書院院長根津一<sup>ねづはじめ</sup>である。根津が清国官民に同文書院を知らしめるために書いた興学要旨と立教綱領は、同文書院建学の精神ともいうべきものを示している。興学要旨においては、日中の英才に世界の実践的な学問を教え、日中友好の礎を築こう、そうすればアジアの平和と世界の恒久平和の計が立つと述べ、また立教綱領においては、中国学生には西欧の実用的語学を授け、日本学生には華語と英語、並びに内外の法律制度、商業工業の要点を授ける、大切なのは中国事情の理解であり、両国国家有用の士を育成するためであると述べている。根津は初代院長として、十五年にわたり身を以って学生を教導した。同文書院教育の根本となる「書院精神」とよばれるものが根津一の人格に具現化されているとの考えは、同文書院卒業生に共有されている。

同文書院の歴史のなかで、徐家匯虹橋路新校舎時代、すなわち大正六年（一九一七）から昭和十二年（一九三七）までの期間、特に満洲事変（一九三二）までの十五年間は最も輝ける時期であった。研究面では翌年、支那研究部が設立された。これは書院が経済的にこれを設置し得る物的保証を持ち得たこと、教員スタッフが充実してきたことを表すものであり、日中関係の危なっかしい平和がその背景にあった。

支那研究部（のち東亜研究部）創設の主旨は、「今や専門的、科学的探究により支那問題研究をおこなう必要がある。上海にあるという地の利は、支那研究遂行の使命を負っているわけで、研究部の創設を教育面に反映させるとともに、学術面での貢献を果たさねばならぬ」であった。研究部規程のなかで注目されるのは、毎年学生の修学旅行計画（いわゆる大旅行）を編成し、これを指導する点である。これとともに研究誌も刊行され、『支那研究』（のち『東亜研究』）は大正九年（一九二〇）から年三回発行された。

#### ◆ 華語研究室

同文書院において中国語は必須で最重要の学科であることは言うまでもない。大正九年以降は高等専門学校となり、常時十数名の日本人・中国人教員を擁し、中国語の研究・教育レベルは極めて高度であった。従来中国語教員によって華語研究会が組織され、教科書『華語萃編』の編集・改訂をおこなうなど研究活動は活発であった。昭和二年度の東亜同文会事業報告書に華語研究室の新設と題して、「研究室は其数従来不足勝なりしを以って其の一部を補うため昭和二年（一九二七）十二月、もとの農工科教室の一部に多

少の加工を施し之を華語研究室に充てり」とある。翌三年、公式に華語研究室が設置され、ややおくれて機関誌『華語月刊』が創刊された。

日本が太平洋戦争へ突入する前年、昭和十五年（一九四〇）の『滬友学報』（二号）による華語研究室の紹介では、「華語研究室は本院華語担任の部員及び支那人講師らによつて組織されているが、当部発行の『華語月刊』は該研究室の責任編集である。その他本院使用の支那語教科書、参考書等は概ね該研究室の編著に係る」。『華語月刊』は「日本における最初の支那語研究雑誌で本院日支人支那語教授講師の執筆する高級支那語雑誌である」。また不定期出版物として、『華語萃編』初集・二集・三集・四集をはじめ、『支那語試験問題解説』、『標準支那語教本』初級篇・高級篇、『支那語構造の公式』、『北京官話旅行用語』、『商業応用文件』、『商業尺牘教科書』、『普通尺牘文例集』、『支那語概説』などの名がみえる。

『華語萃編』に代表される中国語教育では、書院卒業生の中国語運用能力が評価されるが、この教科書自体が中国語研究上の成果を示すものである。

『華語月刊』は主として同文書院学生を対象として編集された中国語の学習雑誌である。四十頁ほどの小雑誌ながら、論文以外に講義、演説、雑文、試験問題と模範解答などの学習者向きの記事が多い。昭和十八年（一九四三）十一月通算一九号をもって休刊（結果的には廃刊）となるまでに、中国語学上の論説が毎号掲載されていた。『華語月刊』創刊前の数年間に『支那研究』誌上に発表された中国語研究論文は総数わずか数篇であった。これらの出版物は内山書店、三省堂上海支店から日本国内へ販売された。

同文書院における華語辞典の編纂は昭和八年（一九三三）の支那研究部事業報告の中に初めて出る。こ

その他、四声辞典しせいの編纂もあげられている。当時、中国における口語の国語辞典といえば、最初とみなされる周銘三編の『国語辞典』が一九二〇年、『王雲五大辞典』が一九三〇年、本格的な中国語辞典である『国語辞典』第一分冊が一九三六年になって商務印書館から出版された。日本の方がむしろ早く、大正年間には石山福治の『中国語辞典』、昭和に入り『井上翠支那語辞典』が一九二八年、竹田復の『支那語辞典』が一九四一年に出ている。いずれも内容的には不十分で、使用者の必要に十分応ずるものとは言い難かった。

同文書院の中国語教員で組織された華語研究室は辞典作成の実力を十分備えていた。昭和八年（一九三三）、鈴木鈴木の主導で編集が開始された。作業は井上翠の辞典を出発点とし、これに必要な語彙を補充していくことから始まった。日本人教員は辞典にない語彙をカードに書き込み、これに発音符号をつけ、日本語の語釈を加え、必要な例文と訳文をつけた。中国人教員は適当と思われる単語を採録し、例文をつけ、また作製されたカードに目を通し必要あれば添削することを担当した。全員が授業の余暇を利用してカード作りをおこなった。

編纂作業に参加した日本人教員の名は『中日大辞典』「編者のことば」のなかで列記されているが、中国人教員は「特に姓名を略す」とし、人数のみ記している。日中間に存在する複雑で敏感かつ深刻な関係をおもんばかり、杞憂の譏りを承知のうえで為されたのであろう。

当初、辞典編纂に関与した主要メンバーは鈴木擇郎（書院15期）、熊野正平（17期）、野崎駿平（18期）、坂本一郎（20期）および影山巍（非書院出身）で、遅れて岩尾正利（27期）が参加した。熊野と影山は昭和十六年（一九四一）に退職した。中頃、編集の作業が進むなか、内山正夫（34期）、山口佐熊（35期）、や

や遅れて木田弥三旺（38期）ら若手の教員が加わるのは、戦火で辞典原稿カードを焼失した第二次上海事変前後である。戦争の拡大により教員がつきつきと戦場に駆り立てられ、末期に金丸一夫（40期）、尾坂徳司（中日学院、北京大）らが参加するが、辞典編纂はほとんど停顿していた。『滬友学報』（二号）の記事、「華語研究室で数年来編集中の支那語大辞典は略完成に近づいているのであるが、事変以来担当者等多忙なため進度が遅くなっているようであるが遠からず完成を見るであろう」は楽観的過ぎるとはいえ、作成された辞典原稿カードは鈴木によれば接收時点で十五万枚に達していた。

#### 資料 1

1-1 華語研究会

1-2 華語研究会会員

## 2

### ◆—カードの返還依頼

昭和二十五年（一九五〇）初、東京の参議院議員会館で本間喜一学長らが参加した日中友好協会発起人会が開かれ、直ちに設立準備会が発足、十月一日には日本中国友好協会（内山完造理事長）が設立された。豊橋支部は全国四番目に発足し、小岩井浄（こいわい きよよし）（愛大法経学部長、三代学長）を代表者とし、愛知大学国際問題研究所内に事務所を置いた。

本間からの辞典カードの返還に対して協力を約束した内山完造は、上海の内山書店老板（ヲオバ店主）として有名である。大正六年（一九一七）創業以来、東亜同文書院と関係が深く書院学生や教授らとは昵懇であった。昭和三年（一九二八）、鈴木が内山書店に居合せた魯迅（ろしん）に自分の担当する中国語特殊講義で講演して欲しいと出講を頼んだとき、言葉を添えてくれたこともあった。同文書院が進めていた華語辞典編集のこともよく承知していた。

内山理事長は協会文化部長の島田政雄理事にこれをまかせた。島田は敗戦後、上海で中国側に留用され

『改造日報』編集に当たり康大川<sup>こうだいせん</sup>など中国人の知己も多かった。その後、帰国し日中友好協会の設立準備会幹事、のち協会理事（文化部長）として活躍した。この頃、日本はGHQの下にあり、そのプレスコードによつて翻訳権のない外国文書は翻訳出版が許可されなかった。そこで島田は鹿地<sup>かじ</sup>亘<sup>わたる</sup>らと日中翻訳出版懇話会を立ち上げ、郭沫若<sup>かくまじやく</sup>ほか五十数名の著書の翻訳権、『人民日報』他の新聞や各種雑誌の掲載記事の翻訳権を島田・鹿地を原権利者として中国側から譲渡してもらい出版懇話会に委任し、翻訳出版して新しい中国の実情を広く日本国民に伝えたいと考えた。島田は中国新聞総署国際新聞局日語科長となつた旧知の康大川に相談した。康はすぐ上司である喬冠華<sup>ぎょうくわんか</sup>国際新聞局長に上申した。喬はこの件について周恩来<sup>しゅうおん</sup>の指示を受けて動いた結果、まもなく全部の翻訳承諾書が康から島田宛に送られてきた。このような信頼関係にある島田と康の存在は辞典カード返還の実現に極めて有利であつた。

鈴木が華文で書いた本間学長名の中国科学院院長郭沫若宛および鄭振鐸<sup>ていしんたく</sup>宛の辞典原稿カード返還願い並びに内山理事長名の添書きは島田から康へ協力を依頼する書簡と共に送られた。

康が島田から連絡を受けたのは一九五〇年末で、すぐ上司に報告しカードの探索を始めた。調査の結果、カードは文化部副部長の鄭振鐸の手元にあることを突き止め、喬冠華局長に報告した。これにより、中国政府内で審議された結果、カードを日本へ返還する決定が下された。この指示を受けた康は、あらためて『人民中国』日本語版編集部気付でカード返還要請をするよう島田へ連絡した。正式な返還願いは一九五三年十月、中国人民保健世界和平委員会主席郭沫若氏に本間学長名で提出された。

翌年四月、同会劉貫一秘書長から日中友好協会内山完造理事長宛に、中国政府の依頼により同会から



カードを日本国民へ贈る旨の通知が届き、九月に十四万枚の辞典原稿カードは大型の木箱二個に梱包されて日本に着いた。

#### ◆—カードの接収

同文書院大学には終戦当時、教職員とその家族および在学生ら百余名がいたが、中国各地の戦線から次々と復員してきた教職員、学生などで数百名に膨れた。国民政府から校舎の明け渡しを要求され、また校内へ中国軍が進駐したため、最終的には上海居留日本人の居住区に指定された虹口ホンキョウの青年会館へ移った。この間に接収が始まると本間らは接収の事務処理や書類の作成に忙殺された。その苦労の結果が『日立東亜同文書院大学接交書』すなわち中華民国政府教育部京滬区特派員辦公処による接収公文書である。大学側は本間喜一、木田弥三旺など四名の署名捺印、中国側は裘維裕以下四名が署名捺印した一三〇頁に上る文書である。それは、土地、建物、什器、備品、消耗品、図書、標本、土地代金請求権ゴルドバすなわち金条、銀行預金、現金及び債権にいたる大学の全財産を網羅した膨大なものである。この間の事情は、当時上海交通大学が作成した『接収日誌』にも詳しく述べられている。例えば一九四五年十月十六日の項には「同文書院木田から財産目録の一部が整っていないので、数日待つて欲しいとの連絡があった云々」、さらに十月二十日から同文書院、教育部、交通大学三者立会いによる目録と現物の照合が始まり、十二月十〜十五日の項には「石炭屑と木炭屑だけまだ秤にかけてないので重量未記帳、他は全て終えた云々」との記述

がある。照合は徹底的になされて十二月二十日付けでようやく目録が完成した。

この中に辞典原稿カードについては何も記載がない。何故かはひとまず疑問としておく。

同文書院は昭和十二年（一九三七）第二次上海事変の際に、大正四年（一九一五）創建の徐家匯虹橋路校舎が掠奪、放火され、体育館以外の全財産——建物、図書、物産館展示物、資料等を焼失した。多数の辞典原稿カードも灰と消えた。翌年、隣地の海格路の上海交通大学校舎を借りて再開し、辞典カードの作製も振り出しに戻って始められた。三年後の昭和十五年頃、三省堂上海支店から華日辞典の出版について話があったが、まだ可能な状態になっていなかった。翌昭和十六年十二月に太平洋戦争が勃発し、厳しい戦時体制となり通常の辞典カード作りはできなかった。とはいえ接収されたカードは十五万枚以上に達していたのである。

鈴木は同文書院蔵書の接収で事前調査に来た鄭に「将来可能であれば、このカードをもとに、自分たちの手で辞典を完成させたい」と申し入れた。これに関連して、『鄭振鐸年譜』の一九四五年九月十日の項に「戦区文物保存委員会は戦時損失精査委員会と改名し、日本の文化機関とその蔵書の接収を始めた。自分（鄭）は教育部から京滬区教育復員輔導委員会委員に任命されたが、これは教育部京滬区特派員辦公処の蔣復璁主任委員が、自分や馬叙倫など数名の知名人を集めて組織したものだ。しかし国民政府の圧力で名ばかりのものとなった云々」とある。鄭は国文学者、書誌学者また蔵書家としても有名で、専門家として委員に任命されたようである。同じく、九月二十日の項で「同文書院の接収に行った、経過情況は甚だ良いが、ただ資料室はからだったのが残念云々」とある。年譜の元となる『鄭振鐸日記』では、九月十八

日の項に「同文書院を視察した」とあり、日付には違いがある。年譜にも日記にもカードについて触れていないが、この時に鈴木は鄭とカードを前にして言葉を交わしている。鄭の視察は九月末で、接収委員会は十二月に接収を完了した。この間にカードに対して何らかの措置が取られた。

一九五四年四月の中国人民保衛世界和平委員会の返還通知の書簡は、これらの疑問を解く鍵を提供してくれる。そこには「……華日辞典のカードは敗戦後、国民政府の国立編訳館が接収した当時、すでに一部が失われていたが、まだなお十四万枚が保存されていた。解放後、新政府に接収され各方面を探した……今は本会が受け取り、両国人民の友誼と文化交流の見地から、贈物として日本人民へ送る」とある。

以下若干解説を試みるが、結論的に言えば、鄭振鐸がその鍵となる人物である。

その一、国立編訳館について。一九三二年、国民政府教育部が南京に設置した機関で、当初は文化化学術書の編集と翻訳を目的とした。しかし、業務はしだいに科学技術用語、化学名詞の統一・命名とその用語集、検定教科書などの編集に絞られた。解放後は中華人民共和国出版総署に吸収された。

編訳館の業務が翻訳や用語集編集などであることが、辞典カードと結びつく点と、一九四九年新中国成立後に同館を接収したのが胡愈志<sup>こゆうし</sup>を署長とする出版総署である点に着目したい。胡は五四文化運動に参加し、文学研究会や上海商務印書館で鄭振鐸と行動を共にし、その後も、ともに抗日救国、反国民党独裁運動で戦ってきた同志の間柄である。以上の点から、カードと編訳館の接点は鄭であると推定できる。

その二、新華辞書社について。一九五五年、愛知大学に到着したカードのなかに、数枚の「新華辞書社カード」の押印があるものが混入していた。これは同社の辞典編集のために作製されたものであり、同文書

院の辞典カードが新華辞書社に存在していた事実を裏付けるものである。ゆえに国立編訳館が一九四五年に接収した同文書院の辞典カードは、遅くとも一九五〇年には新華辞書社へ移されていたと思われる。

新華辞書社は国家出版総署副署長の葉聖陶（よふせいとう）の主導により、新中国が緊急に必要な用語辞典編集のため、一九五〇年に設置された出版社で、一九五三年、初の口語の国語辞典（文字典）『新華字典』魏建功（ぎけんこう）主編を出した。新華辞書社は一九五六年、中国科学院（現中国社会科学院）語言研究所詞典編輯室に編入された。この字典はポケット版サイズで同文書院のカードが利用された可能性はない。

その三、商務印書館について。清末民初以降の中国屈指の近代的印刷、出版会社。一般図書から専門書、学術書、また新式小・中学校用教科書から『辭源』、『國語辭典』（中国大辭典編纂処編）など各種の辞書類の印刷、出版をおこなった。また各分野の外国書の翻訳、出版や『小説月報』など文学雑誌の編集、出版までに及ぶ、近代中国の文化事業全般を語るのに欠かせぬ存在である。中国大辭典編纂処のちに新華辞書社と同じく語言研究所詞典編輯室に編入された。鄭が『小説月報』の編輯の職にいた一事をとつても、商務印書館との密接な関係がうかがえる。

以上を総合して、鄭振鐸の意向により辞典原稿カードは接収公文書に記載されずに所在場所を移したが、一貫して鄭の管理下に在ったと断定できる。

## ◆ カードの受け取り

昭和二十九年（一九五四）七月、辞典カードの受け取りに鈴木ら辞典関係者が訪中することは叶わなかった。結局カードは八月末に天津塘沽<sup>タングク</sup>へ回送され、中国在留邦人の帰国船興安丸に載せられた。協会側乗船代表の島田理事（当時、日中友好協会、日本赤十字社、日本平和連絡委員会の三者が日本政府を代理した）が中国側の康大川国際新聞局日本語科長からカードを受け取った。

塘沽港から舞鶴港へ運ばれた二個の木箱は十月初、東京の日中友好協会に到着した。中旬、協会本部で、伊藤武雄協会理事長と本間学長並びに鈴木、熊野、野崎、坂本の同文書院華語教員による協議がもたれた。その結果、同文書院の華語辞典編纂を継続し完成させる熱意と能力を有する愛知大学が、辞典編纂に責任をもつことに決まった。

鈴木は岩尾正利ら日本在住の書院華語教員で連絡可能な者へ、協議の結論を通知し意見を聞いたところ、全員から同意が得られた。

本間はカードを受け入れ、華日辞典を編集・出版させるため、学内の理解と支援を得るべく、この間の経緯と今後の編纂計画、工程表の素案の作成を鈴木に委ねていた。鈴木は編集の具体策を考えてきたが、その念頭には常に内山正夫が存在していた。戦後、郷里で英語教員をしていた内山は、鈴木らの世代を受け継ぐ書院の華語教員であり、辞典編集に従事していた。さきの協議においても、愛知大学で辞典編纂を

おこなうにあたって、内山及び中国人専門家の参加が不可欠とされていた。

カードの返還が実現し愛知大学が辞典編纂をおこなうことに対して、滬友会（同文書院同窓会）の一部から強い非難と反対がおき、東京で辞典編集をおこなうべきだとする意見もあった。

そもそも、本間らが帰国してから愛知大学設立に至るまでの全行動について、当時の滬友会幹部から悪意に満ちた非難中傷がなされ、これにより大学と滬友会は不正常な関係が続いた。今回、返還されたカードの処置をめぐり、また繰り返し返されたのである。

無からの出発を強いられた愛知大学は、設立時から綱渡りのな経営を余儀なくさせられた。大学財政の危機的状况に、華日辞典編纂事業が更なる圧迫となることは必至である。本間は学内の同意を、いかにして取り付けるかに腐心していた。鈴木に依頼し作成した華日辞典編纂の顛末ならびに内山、中国人専門家の人事案と編集計画、日程表を基に華日辞典編纂事業の骨子をまとめ、昭和三十年（二九五五）一月、大学評議会に提案した。本間は同文書院時代からの経緯、辞典編纂の意義について言葉を尽くして説明した。審議の結果、編纂事業そのものは了承されたが、印刷・出版経費については反対意見が多くでた。取り敢えず愛知大学国際問題研究所内に辞典編纂部門を設け専任者（内山）を置き、執行予算をつけることが認められた。同年二月、あらためて本間は華日辞典刊行会を設立し、下部組織として辞典編纂処をおき編集にあたらせる改正案を提出し評議会の同意を取り付けた。刊行会はもっぱら外部から出版経費を獲得するための組織として期待されたのである。

同年四月、華日辞典編纂処が発足した。成員は編纂委員長鈴木擇郎、編纂委員内山正夫、桑島信一（書

院28期) および専門委員張祿澤(中国大学国文学)と編纂事務囑託の今泉潤太郎(愛大3期)である。辞典刊行会の設立は五月にずれこんだ。

## 資料2

- 2-1 カード返還の請求(書簡類)
  - a 内山完造日中友好協会理事長宛 本間学長の書信
  - b 郭沫若中国科学院院長宛 本間学長の書信
  - c 鄭振鐸氏宛 本間学長の書信
  - d 郭沫若院長宛 内山理事長の書信
  - e 鄭振鐸氏宛 内山理事長の書信
  - f 本間学長宛 内山理事長の書信
  - g 鈴木・桑島両教授宛 内山理事長の書信
  - h 「人民中国」編集部宛 内山理事長の書信
  - i 「人民中国」編集部宛 本間学長の書信
  - j 内山理事長宛 劉貫一中国人民保衛世界和平委員会秘書長の書信
  - k 島田政雄日中友好協会理事の書信
- 2-2 カード到着前後
  - a 関連記事(1)(2)(3)(4)(5)(6)
  - b 鈴木教授宛 能智修弥理事の書信(1)(2)

- c 伊藤武雄日中友好協会理事長宛 本間学長の書信
- d 華語辞典編纂顧末
- e 張祿澤女史招聘状



### 3

#### ◆ 編纂処の開設

豊橋キャンパス正門（渥美線南栄駅寄りの門、愛知大学前駅は副門）を入れてすぐ左手、線路沿いに木立に囲まれた平屋の建物がある。昭和三十年（一九五五）四月、「華日辭典編纂處」の表札が掛けられた。風倒木の松から挽いた板に大書された文字は「康友」の雅号を持つ鈴木擇郎の手になる。学内合同教授会などに使用されてきた建物に、机、椅子、書架などが運び込まれ、部屋の真ん中にダルマストーブも置かれた。窓際に並ぶ四架の大型カードボックスが目を引く。昭和八年（一九三三）上海の東亜同文書院で作成され、敗戦で中華民国政府に接収された後、社会主義革命を経て成立した中華人民共和国から返還された辞典原稿カードが内山と今泉の手で机の上に積み上げられた。数奇な運命を辿った十四万枚のカードは用紙もインクの文字も変色し、二十二年間にわたる日中間の変遷を映している。

なにぶん、この間に中国語を取り巻く環境が激変した。昭和二十四年（一九四九）十月、世界の歴史に新しい一頁を開いた中華人民共和国が成立した。社会主義を標榜する中国の出現は世界の人々の耳目を驚

かせアジア、アフリカ、ラテンアメリカ等いわゆる第三世界のリーダーとしての存在を予見させるものがあつた。中国社会の変革に伴つて中国語の分野における変化にも目を見張るものがあつた。

社会主義建設のスローガンのもとに、一九五〇年代には普通話（現代漢語標準語）の普及と方言の整理、拼音字母と審音、異体字の廃止と簡化漢字（簡体字）の制定などが矢継ぎ早に実施され、中華民国時代に始まつた国語統一運動が一挙に完成した様相を呈した。新中国の新聞、雑誌、書籍、その他すべての印刷物は随時この成果を採り入れて出版された。さらに『学文化字典』、『同音字典』、『新華字典』など小型の国語辞書や多数の科学技術専門書等が大量に出版された。簡化漢字で印刷された社会主義中国を反映する多くの新語彙を目にして、日本人は慣れ親しんでいる従来の漢字、中国語との違いに戸惑いを覚えた。まして中国語の学習者にとっては衝撃的で、従来の中日辞典では対応できないことを容易に実感させた。

返還された辞典原稿カードもすべて書き直すことになるが、それは編集作業の前段に過ぎない。内容を含め全部、新規巻き直しでやらなくてはならぬ、これは関係者全員の一致した考えであつた。

開設時の編纂処のメンバーは編集委員長鈴木澤郎、編集委員内山正夫、桑島信一と専門委員張祿澤および編集事務今泉潤太郎の四名である。華日辞典刊行会暫定規約に定められた編集委員は学外の熊野正平、野崎駿平、坂本一郎ら旧同文書院華語教授を含めていたが、実際の編集作業は愛知大学側でおこなうと了承されていた。このほか専門委員として池上貞一（書院40期）、尾坂徳司（法政大）ら旧同文書院華語教員と張祿澤、および協力委員として学内の三好四郎（書院教員）、杉本出雲（40期）、川崎一郎（44期）ら中国関係教授と小幡清金、胡麻本蔦、杉浦治七、松葉秀文、黒木三郎教授らである。学内外の関係者を網羅

した形式的なものである。

辞典編纂の大綱となる執筆基準・凡例の作成をおこなうなかで、早々と学内の編集委員、専門委員、協力委員（中国関係）を集め拡大編集委員会が数度開催された。

めざしたのは、(1)日本の大学生が中国語を学ぶのに役立つ辞典、(2)現代中国を多面的に深く理解するための辞典、(3)規範化された現代中国語の辞典である。

編集委員会は現代漢語標準語（普通話）を主に中古白話、古漢語、方言などを含め、政治経済、科学技術、動植物用語から日常の生活用語に及ぶ小百科事典的な性格をもつ辞典を編集目標とした。

当時参考とした新中国の辞典はいずれもポケット版の『新華字典』、『同音字典』、『農民詞典』、『少年兒童字典』などで、一九五〇年代の出版である。このうち『同音字典』（中国大辞典編纂処編）は最も示唆に富むもので、大いに参考とした。中国の規範的な中型辞典『現代漢語詞典』は一九五八年に編集作業が始まったばかりである。

内山が作成した執筆基準原案は、拡大編集委員会で審議されたのち刊行会へ報告された。

このなかで、

- (1) 見出し字を一箇所で説明する。[行] hang/xing は xing に集中し、[行] hang ⇓ xing とする。
- (2) 品詞分類をしない。語の認定、選定の基準をゆるめ、単語、熟語、成語、慣用句、常套句など等しく見出し語とする。

二点はのちに、あらためて論議を呼ぶこととなる。

執筆基準が決定し原稿カード作成の準備が整った。

#### ◆ 執筆基準と凡例

執筆基準とは辞書を作る側が辞書の原稿カードを書く際に遵守すべき基準である。辞書の本文―見出し字（親字）、見出し語とその発音・釈義・解説、例文とその訳語などの書き表し方、そのなかで用いる符号・記号などの形式や使用方法等にまで及ぶ詳細な規定である。中国語と日本語双方について適用される。辞典の執筆とは原稿カードを作成することにほかならず、カードは例外なく必ずこの基準どおりに書かなければならぬ。さもないとおよそ辞書の名に値しない代物となってしまう。

凡例とは辞書を使う側が的確にその辞書を引くために依拠すべき基準である。必要な事項を、易しく的確に示したものであり、執筆基準と表裏一体をなしている。『中日大辞典』の執筆基準は中国語について、(i)使用漢字は中国のすべての簡体字を用いる、(ii)発音表記法は「漢語拼音方案」を用いる、(iii)語彙―親字と見出し語の配列は、アルファベット順、声調順とする、この三つを柱として、親字、見出し語、発音、例文などの執筆について具体例を挙げて詳しく説明している。また釈義、解説、例文の訳語などの日本語については、文部省調査局国語課、国語審議会「国語の書き表し方」、「公用文の書き方」などに準拠して執筆することとした。中国の人名、地名など必要に応じて使用する旧字体の使用などについても細かく解説している。そのほか記号類の形と用い方についても定めた。

資料として掲げたものは、昭和三十六年（一九六二）十月第十一次改正のもので、ほぼ決定稿である。勿論初めからこのように整っていたのではない。編集の進捗に応じて適宜修正、追加された結果の産物に他ならない。

当時はプリンターがないので、執筆基準作りは実に面倒であった。手書きの原稿―基準（案）をガリ版摺りとし冊子に綴じて編集委員へ配布する。これを元本とし訂正や追加があれば簡単なものは各人が手書きする。複雑なもののはガリ版摺りにして、元本に切り貼りした。追加や修正がふえて継ぎ貼りでは収まらなくなると、あらたに該当頁をガリ版摺りし、改訂版として新冊子をつくった。改訂版は数度作られたが、みなガリ版摺りである。

資料に掲げたものは本書の資料として収録するために活版印刷したものであり、実際に使っていたものとは別物の感がする。最終すなわち最新となる執筆基準の現物は保存されていない。

執筆基準で述べている「この辞典の使用漢字は中国のすべての簡体字を用いる」について一言触れておく。当時、日本国内で先行した鐘ヶ江信光編の大学書林『中国語辞典』、香坂順一・太田辰夫編の光生館『現代中国語辞典』、倉石武四郎編の岩波『中国語辞典』などは偏旁簡化字まで用いていなかった。この活字製作費が巨額にのぼるため用いることができなかつたのであろう。鈴木が「すべて」の簡体字を用いると断言したのは、やや現実無視のきらいがある。ただ同文書院時代から本格的な中国語辞典を作る信念を持っていた鈴木にすれば、至極自然なことであつたに違いない。のちに印刷が具体的になつた段階で印刷会社から出された見積書を見て、簡体字の活字製作費があまりにも巨額なのを知り驚いたと鈴木は述懐し

ている。

### 資料3

- 3 | 1 辞典編纂處開設と辞典編集の開始
- a 華日辞典編纂委員会規約、編纂費予算案（手書きメモ）
- b 愛知大学評議会議事録
- c 関連記事 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10)
- d 執筆基準

## ◆ 編集経過

当初の編集見通しでは、

- (1) 返還されたカードの整理、補充に一年。この間に不要なカードを選別し、必要なカードの中国語を簡体字、発音表記を拼音記号に書き換え、拼音順（a b c 順）にボックスに収める。
- (2) 辞典専従者を増員し、執筆基準による本格的なカード作製に二〜三年。辞書類、参考文献、文学作品などから用語、用例の採録をおこなう。
- (3) 完成順にカードを印刷へ廻し初校を進めると共に、残りのカードを完成する。二、三校は外部に委託、四校校了、印刷・製本で二年。

以上六年程度で完了することを目処とした、極めて大雑把なものであった。実際にはこの倍の日数を要した。

編輯専従者の異同の点から全編輯期間を三期に分けることができる。第一期は昭和三十年（一九五五）

四月～三十二年（一九五七）三月、鈴木、内山、桑島、張、今泉。返還カードの整理、点検をおこなう。部屋を整備、資料収集と執筆基準作製などに終わる。第二期は昭和三十三年（一九五七）四月～三十八年（一九六三）三月、鈴木、内山、桑島（前半まで）、張、今泉に加えて、宗内鴻（書院15期）、遠藤秀造（19期）、おうようかりよう歐陽可亮（同文書院華語教員）、志村良治（東北大特別研修生修了）、杉本晃（愛大1期）の十人体制となった。新語や出典からの例文の採録など、本格的な編集の段階であり、カード後半の途中まで完成。第三期は昭和三十八年（一九六三）四月～四十三年（一九六八）二月、当初予定を二年オーバーしたこと増員分がなくなり、鈴木、内山、張と今泉。四十一年から最後部カード作成と並行して完成カードから出稿、印刷、校正の段階。再校は志村、長谷川良一（早稲田大、書院44期）、三校は荘司格一（早稲田大）、立間荘介（慶應大）ほか外部の各氏に委託した。

愛知大学の中日辞典編纂は辞典カードの返還時から新聞各紙に取り上げられ、学内外から関心と期待が寄せられていた。編纂処の開設にあたり「世界一の大華日辞典を編集、三年計画で取りかかる」と大見出しをつけた新聞記事が出たこともある。当初、大学評議会へ提出した辞典編集の予算が当面三年間であったこと、また、中国語新語彙研究を課題とする三年間の文部省科研費を申請したことを混同して、三年で辞典ができてしまう感を与えるが、当時、世間の期待と空気を反映したものであった。

鈴木は後に「最初の見当は六か年程度であったが大幅な見込みちがいだった」とも「完成期がいつなのか全く見当がつかなかった、最初の六年が経過しても漠として確定し難かった」とも述懐しているが、結果的に完成までに予定の倍の期間を要した事実は、当初の計画が極めて楽観的な予測の上に立って作られ



たことを物語っている。

この間の事情を「編者のことば」で要約すれば、一九三三年同文書院で開始された中日辞典編纂は一九五五年四月愛知大学で業務が再開され編纂委員会が組織された。鈴木がこの事業を発起し推進にあたってきた一人であったので編纂委員長を命ぜられ、専任者として内山、張、今泉、兼務専任委員として桑島によつて発足し、一九五七年にはこれに遠藤、宗内、志村、杉本と短期間ながら歐陽も加わり編集陣容は充実した。しかし一九六三年から経費節約のため別途人件費を必要としない鈴木、内山、張、今泉となり（桑島は病気で早い時期に抜けた）、これは大学財政上やむを得ない措置であつたにせよ当初計画を大きく遅らせた一要因となつた。また、完成期を当初六年とした最初の見通しの甘さがあつたのである。

本格的な作業が始まり、編集は大きく進捗した。同時に、解決すべき課題も増え、完成予定の昭和三十七年（一九六二）を過ぎたが、編集作業は未だ完了しなかつた。鈴木はやむを得ず、数年の延長を願ひ出た。鈴木の説明を了解した本間は、予定内完成の約束に違反し、苦しい大学財政に更なる負担となること等を理由に渉る大学評議會を説得し、出版費はすべて辞典刊行会（本間）が責任を持ち、大学に迷惑をかけることを条件に編纂事業の継続の承認をとりつけた。しかし増員枠は取り消され、メンバーは発足時に戻つてしまった。事務局からは予定オーバーを理由に辞典室の明け渡しを迫られるなど、肩身の狭い思いをした。延長は認められたものの、以後鈴木が言う「雪もよいの空、逆風のなか」の六年間となり、夏休み、冬休み返上の編集作業が続くことになる。鈴木は辞典完成後に「編纂の仕事が楽しいんだろう、いつまで続くか分からんぞとか、編纂室はいつ返してくれるのかとかと毎年の催促、こちらはもう一年という

毎年の返事、局外者からは、われわれがのらりくらりとやっているように見えたのかも知れない」と当時を振りかえり述べている。

辞典原稿カードの完成まで多大の時間を要することは当初から予想されていたことである。今回の遅延が鈴木、内山らの怠惰に起因するものではないことを本間は熟知していた。予定が大幅に延びても鈴木に対する本間の信頼はいささかも揺るがず、編集作業の進捗をあたたかく見守った。鈴木に全幅の信頼を寄せ辞典編纂処への逆風が台風とならぬために更なる配慮を怠らなかつた。

カード完成後の問題は印刷・出版費である。予想される巨額な費用の捻出は貧弱な大学財政では不可能であり、本間は外部資金の調達を想定して当初華日辞典刊行会を設立したのである。

#### ◆ 印刷と製本

作成された四十万枚の原稿カードから推測すると、辞典本文だけで二千頁近くになる。漢字検字表、日本語索引、付録などを含めて二千頁、初刷部数一万冊の条件で大日本、凸版、図書の三大印刷会社から見積りをとった。偏旁簡化字まで含めて数千の簡体字を揃える必要があり、金額も大きいと予想された。三社の見積価格の差に数千万の幅があるのは、簡体字の活字作製費を如何に見積るかによるものであると知って納得できた。自費出版となった後、辞典の総発売元は中国書籍の販売を行っていた株式会社大安と決めた。同社による交渉の結果、簡体字の作製費用は会社側の負担という条件で図書印刷と契約を結んだ。

印刷、製本は二年を予定した。昭和四十年（一九六五）初、同社沼津工場で印刷に先行して簡化字の活字母型の製作がおこなわれた。十センチ四方の和紙に墨書された簡化字が母型の原稿である。この数千枚の原稿の校正のため今泉が沼津工場へ度々出張した。初稿の校了後に本文のみで二千頁をオーバーするところが判明した。そのために文字を上下の行の余白に追い込むなどの手荒な手段をとったので、小さい活字でビッシリ印刷された紙面がさらに見づらくなった。見てわかり易い辞典作りへの配慮は結果的に無視された。初刷本は紙表紙でひび割れが生じたが、二刷以降は是正された。表紙の色は漆黒、金色の題字は鈴木本の発案で『曹全碑』から中・日・大・辭・典の五文字を採録したものである。

辞典本文一九四七頁、六ポイント活字で総字数六〇〇万。部首検字表、日本語索引および付録を合わせ二二三九頁。B6判である。大辞典といえば週刊誌サイズが一般的であり、『中日大辭典』は見劣りしたが、当時既刊の中日辞典と区別するため敢えて命名された。

発売予定は大幅に遅れ、昭和四十二年（一九六七）末に「過去何回かにわたる発定期日の延期」を詫び、「これ以上遅延することは絶対にございません」と愛知大学中日大辞典刊行会、株式会社大安、図書印刷株式会社との連名で購入予約者に陳謝する事態となった。この原因は校了の段階に入る一九六六年六月、無産階級文化大革命（プロレタリア文化大革命、文革）が起こり、これに関連する語彙を急遽採り入れたことに起因する。文革に対し世界的に高まった関心と知識欲に対応した措置であり、結果的に多数の文革新語が収録され、辞典の評価をいっそう高めることとなった。しかし校了後の固定された枠組み内で語彙を差し替えるのに予想外の時間を費やしてしまい、遅延のお詫びを出すに至った。この直前に鈴木はようやく

「編者のことば」を書き上げる余裕を得た。

#### ◆ 辞典刊行会

辞典原稿カードは中日文化交流のため日本人民へ贈るものであるとの中国側の認識は、どの程度辞典関係者に共有されていたか不明である。日本人民（代理 日中友好協会）が受け取り、元の所有者東亜同文書院大学（代表本間）、著作者同大学華語教授（代表鈴木）と協議した結果、愛知大学（代表本間）が辞典編纂をおこない、辞典を完成させることとなったのが実態である。これを目的として刊行会が設立された。

昭和三十年二月、大学評議会で承認された華日辞典刊行会暫定規約では、伊藤武雄（日中友好協会理事長）、鈴木擇郎（愛大）、熊野正平（一橋大）、野崎駿平（東北大）、坂本一郎（神戸市外大）ら同文書院華語教授ならびに本間喜一（愛大）学長、同文書院学長）、小岩井浄（愛大法経学部長、同文書院教授）、山崎知二（愛大文学部長）の八名が評議員となり刊行会を組織する。刊行会の中に鈴木を委員長とし編集委員会を置くとした。

学内では刊行会の設置がもっぱら外部からの出版費確保のためと理解する向きが多かったが、本間は出版後を考えていた。暫定規約の第二条、第三条はそのための項目である。すなわち辞典売上げの収益は日中の学術交流のために刊行会評議委員会の議を経て用いるとした。大学評議会の干渉を避けた点に注目した者は皆無であった。これから辞典編纂を始めるかどうかの議論に、辞典が売れたら利益をどう使うか

を云々するのは、捕らぬ狸の皮算用である。しかし十数年後に中国との交流が着実に実施された事実を見れば、本間の慧眼は余人の及ぶところではないことがわかる。

#### 資料 4

##### 4-1 編集

- a 文部省調査局国語課との通信
  - b 伊藤理事長宛 鈴木教授の書信
  - c 福田恒存氏の所論に対して
  - d 鈴木教授訪中
  - e 本間学長の口上
  - f 科研課題協力者へのお願
  - g 文部省研究費による機器購入
  - h 科研課題協力者との通信(1)(2)(3)(4)(5)
  - i 朝日新聞社笠信太郎氏の電文
  - j 朝日新聞社李家正文氏との通信(1)(2)(3)(4)(5)
  - k 中国現代用語辞典の編集(1)(2)(3)
  - l 関連記事(1)(2)(3)(4)
- 4-2 出版
- a 辞典刊行会暫定規約

- b 辞典刊行会評議員会(1)(2)(3)
- c 伊藤武雄氏宛 辞典刊行会の書信
- d 内山完造氏宛 辞典刊行会の書信
- e 刊行会趣意書
- f 本間学長との通信(1)(2)
- g 岩波書店の書信
- h 大学評議会議事録(1)(2)(3)(4)
- i 刊行遅延のお詫び
- j 関連記事(1)(2)
- 4-3 『中日大辞典』の誕生
- a 編者のことば
- b 中日大辞典の編纂①
- c 関連記事(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)(11)(12)(13)
- d 書評他(1)(2)(3)(4)(5)
- e 編者 鈴木擇郎(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)(11)

## ◆ 自費出版

本間学長は辞典カードの返還になぜ熱心だったのか、ご自身で語ったことは無いようだ。ゆえに以下はすべて推測の域を出ない。

日本の敗戦に伴い中華民国政府に没収された東亜同文書院大学の財産（の一部）である辞典原稿カードを、中華人民共和国政府に対して、元の所有者である本間と著作者である鈴木が返還を願ひ出る。もし返還されたら愛知大学は責任をもって辞典を完成させる。この行為は適法であり、道理がある。

ただし、いかに理にかなっていても情況が許さなければ如何とも為しがたい。

現在、中国当局は対日関係上この願ひ出を慎重に扱うであろう。辞典カードの所在を調査し確認するはずだ。調査もせずに門前払いはしないであろう。接収の際、鈴木の言葉を耳にした鄭振鐸はいまや文化部副部長の要職にあり、カードの存在を知る者である。知日派の郭沫若は中国科学院院長として中国学術文化界を代表する人物であり、彼の助力が期待できる。新中国との友好を願う国民の声を反映して、昭和二

十五年（一九五〇）日中友好協会が設立され、全国的に国交回復運動が展開中である。カードの返還は日中友好関係を推進し辞典の出版は文化交流に役立つ。辞典原稿カード自体は金銭的に無価値であり、返還しても他へ波及することはない。おおよそこのように整理できる。

道理があり同情や共感があり、状況が許せば事はなると信じて本間は行動した。愛知大学の設立も然り、昭和二十七年（一九五二）の愛大事件、三十八年の薬師岳山岳部遭難事故への対処も然り、越知専（愛大1期）が本間イズムと名付けた行動原理である。

本間は鈴木の場合に沿って辞典編纂事業の全体像すなわち編集作業の内容と問題点、原稿完成までの時間と必要人員、予想される経費並びに辞典の印刷と出版について、骨子を作った。当時さらに理事長兼学長として大学の経営に苦心するなかで、辞典編纂事業を進めた。「いいものさえ作っておけば何とかなるといふ呑気な考えを持って居たものの資金調達の能力はゼロなので、資金調達は一切本間先生にお願いし、お骨折りを願っていたのであった」との言葉どおり、鈴木は「いい」原稿を仕上げ、本間は刊行に腐心した末に辞典は出版された。

辞典編纂は当初六年を予定し、相応の編集費と膨大な出版費が予想された。大学財政に影響が及ぶのは必至である。本間は資金面では別途の手立て、すなわち外部からの助成金と補助金の獲得を講じた。当初、文部省の科研費では内山が申請書作りにあたり、早々とかなりの額を獲得した。また朝日新聞社からは中国現代用語辞典出版の編集費助成を得た。その後、学内の事情により辞典編纂処の手から離れ、平成元年（一九八九）に大修館書店から国際問題研究所編『中国政経用語辞典』として出版された。



大学評議会の関心はもっぱら編集費をどう手当するのかであったが、本間はこれと共に当初から辞典出版後を視野に入れて考えていた。愛知大学が作った中国語辞典を国内は勿論、中国や欧米にも広く販売して、その収益を積み立てて、中国との学術交流の基金とする。そのために評議会の干渉を避けて組織された華日辞典刊行会の設置を考えたのである。

当初、鈴木の本頭にあった出版社は三省堂であった。かつて同文書院時代に同社上海支店から華日辞典の出版について打診を受けた記憶があり、内心いささか期待するところがあった。原稿完成の目処がついた昭和四十年頃、鈴木はさっそく三省堂へ話をもつていったところ、別の中国語辞典（『熊野中国語大辭典』）の編集が進行中であることを知り、断念した。

本間もまた、以前から出版社探しに留意しており、既知の安部能成あべよしげの紹介で岩波書店に相談したところ、「小さい薄い中国語の辞書を出していたので、別の大型辞典を出すことに難色を示した」のであった。同書は昭和三十八年（一九六三）に倉石武四郎編『岩波中国語辞典』として出版された。本間が大いに期待していたのは平凡社であった。かつて辞典カード返還に関して同社社長の下中弥三郎しもなかやさぶろうと話す機会を持ったところ、いま調査費までは出せないが、将来出版する際は相談に応じようと好意的であった言葉をたよりに、本間は辞典出版の話を持ち込んだ。創業者没後の二代目社長は全く関心を示さず、不本意な結果となった。この他の出版社との交渉は特にないようだ。本間は早々と出版社に見切りをつけ「自己出版しなくてはならん」次第となったのである。

編集作業が長引き原稿カード完成の目処がつかないため、これら出版社への打診が遅れたことも否定で

きない。予定の倍の年月を費やしたことについて、鈴木は辞典の「編者のことば」で詳しく説明している。遅延の責めは編集側にあるが、この時期に中国社会の急激な変化がもたらした影響をまともに受けたゆえでもある。

言語面では民国時代から始まった国語改革運動が一定程度の進捗を見せたものの、近代国家の国語となるべき言文一致の完成に至らなかった。新中国のもとでこの運動が全面的に展開され、成就したのである。簡化漢字、異体字、標準語音、標点符号、漢語拼音方案などが制定された。

ゆえに愛知大学の辞典編集はこれら成果を取り込みつつ並行しておこなわれた。一つの課題の処理に没頭するなかでさらに次の課題の処理が重なり、時間を食う面倒な作業となる。これらの総作業量は膨大なものとなり、さらに加えて編集完了の時期に文化大革命が始まり、結果的に予想外に原稿完成時期を遅らせた。その反面、内容が充実した辞書ができたともいえる。

大手出版社との交渉を断念、自己出版と決してから、印刷出版費の調達は刊行会（本間）が全責任を負うことになった。辞典の予約代金を費用にあてることを目論み、本間は新聞社、商社廻りを精力的にこなした。その熱意に応じて日本通運から大口の予約金を前納する確約を得た。さらに中日新聞社、朝日新聞社からも大口の予約が取れ、毎日新聞社は大口の予約の全部を中国側へ贈呈する意向を示した。これに示唆をうけて贈呈分込みの予約方法を取り入れたところ、はからずも商社側から歓迎され、まとまった部数に達した。

辞典を二冊予約し、一冊は会社用に、もう一冊は中国側への贈呈用にする。中国の商慣習で「買一送一」

(一つ買ったから一つおまけ) というのがあるが、その逆をいった。本間の熱意に応え損得抜きで愛知大学を支援し、日中学術文化交流に寄与するとはいえ、会社として多数の辞典を購入するのは相当の出費となる。しかし辞典は会社の名義で送られるので、損して得しろと考え、对中国ビジネス戦略上で得策と判断されたようである。

当時、日本は米国主導の中国敵視政策に追隨して中国と国交断絶中であつた。朝鮮戦争後対中禁輸政策がおこなわれるや、中国はこれに対抗して友好的と認めた国家・企業との間で貿易をおこなう政策をとつた。それが毎年春秋二回開かれる広州貿易会―中国輸出入商品交易会である。米国に付度して日本の大企業はダミーの友好商社を通じて中国と商売する手法を用いた。明和通商は三菱商事、第一通商は三井物産の別会社として交易会に参加したのはその一例である。また新聞、放送などマスコミの分野はとくに厳しい規制を受け、外国の報道機関が取材のために中国へ行くことは著しく困難であつた。入国を許可された場合でも取材活動は極端に制約を受けるのが常であつた。新聞各社は記者の派遣枠の獲得をめぐり、中国側にさまざま働きかけていた。諸々の制約のもとで中国側との友好関係を築くための努力を惜しまなかつた。文化大革命以後は一段と厳しい様相を呈した。

この案は当時の状況に見合う、まさに時機を得たものであつた。日中友好のため返還された辞典原稿カードをもとに、愛知大学が編纂し、企業が賛助して出版された『中日大辞典』を、その企業の名義で中国に贈呈し、日中文化交流の促進に寄与する。有体には言え、日本の企業は公然と中国側へ贈答品―辞典をプレゼントし、中国は一千余冊の辞典を受け取ることとなり、何より大学側は念願の辞典を出版できる。

大岡裁きの「三方一両損」とは真逆で、三者は三様の利益を得ることになった。

小岩井学長の没後、本間は再び第四代学長として復帰したが、昭和三十八年（一九六三）初、山岳部薬師岳遭難事故の責任をとり学長を辞した。その後、名誉学長となつてからも引き続き刊行会の役員として活動する。折から愛知大学創立二十周年記念事業の項目に辞典出版が取り上げられた。万一、印刷費不足が生じた場合は大学が一定額の融通をする内意が示された。辞典刊行会（本間）はすでに出版費の目処がたつていたので、自己出版に踏み切つた。

カードの返還から辞典の編集、出版に至るまで最初から本間と鈴木の良い相談相手となつたのが大安社長の小林実弥（書院42期）である。小林は新中国の文物、出版物を専門に扱う書店を東京で立ち上げ、昭和三十年（一九五五）に同期の大山茂を専務に迎え業績をのばして神田神保町に進出した。ダイレクトメールによる書籍販売に力を入れ、月刊の書籍カタログ『大安』は中国専門家の寄稿や中国学術界のニュースなどを毎号掲載し珍重された。全国の大学、大学生協書籍部への販売に力をいれたので、地方在住の者には中国書を手する貴重な存在であつた。以来、とくに大学や研究機関、官公庁、新聞社、商社などでも着実に実績をあげ、この業界屈指の専門書店となつた。小林は開業後しばしば鈴木を訪ね、国際問題研究所や大学図書館へ中国書籍を納入した。辞典編纂処が開設され編集が始まると一段と密接な関係をもつた。辞書編集の参考となる文献はカタログに入っていないものが多く、僅少部数の出版物でも注文によく応じてくれた。また中国における辞書編纂の情報をいち早く知らせてくれた。とくに自費出版決定後は本間に協力する力強い存在であつた。また印刷、校正の段階において同社の坂本健彦氏の協力を得た。辞典

刊行会は正式に大安と印刷、出版、販売に関する契約を結び、辞典総発売元となった。昭和四十年（一九六五）に入り辞典刊行趣意書が愛知大学中日大辞典刊行会名で公表されたが、所在地を株式会社大安内と  
している。

#### 資料5

なし

## 6

### ◆ 訪中学術代表团

昭和四十七年（一九七二）二月、ニクソン大統領が訪中、毛沢東主席と会談し米中共同宣言が発表され、世界を驚愕させた。二年前の四月、名古屋で開催された国際卓球大会における米中両国チームの交流を端緒とする、いわゆるピンポン外交の成果である。ちなみにピンポン外交が展開するなかで『中日大辞典』の果たした意外な役割が近年明らかとなった。詳細は資料 8-5b 「ピンポン外交と中日大辞典」を参照されたい。九月、田中角栄首相が訪中し周恩来総理と会談して日中共同声明の発表となり、日本も国交樹立に舵を切った。

鈴木はかねてから辞典編集上の問題点、疑問点について中国側から意見を聞くことに積極的であった。辞典編纂が始まった昭和三十年（一九五五）十二月、中国学術代表団の来日の際には郭沫若団長の来訪を要請し、多忙な郭の代理として馮乃超副団長（中山大学学長）が来学し華日辞典の編纂を視察した。以来、辞典編纂は中国側から各種の参考文献の提供を受けるなどの交流が始まった。また鈴木は昭和三十三年

(二九五八) 五月に愛知県平和代表団副団長として訪中の際、中国文字改革委員会、中国語言研究所などを訪問し関係者と懇談したこともあった。

昭和四十三年(一九六八)二月に刊行された『中日大辞典』は愛知大学から日中友好協会経由で中日友好協会(廖承志会長、郭沫若名誉会長)へ寄贈された。辞典の完成までに受けた多くの厚意に対する謝意と、今後より良き辞典にするため中国側専門家との交流を望む旨の挨拶状が添えられた。交流希望は鈴木 の発意によるものであった。ほどなく辞典受贈の謝意が日中友好協会を通して大学に伝えられ、交流については関係方面に伝えたと付言されていた。文化大革命は三年たつても激しさは一層増して衰えを見せず、早急な訪中は難しいと思われた。

昭和四十六年(一九七二)九月、細迫朝夫学長は訪中する日中友好協会代表団の穂積七郎前代議士(地元選出社会党)に託して、増刷したばかりの辞典を郭沫若名誉会長に進呈し、あわせて辞典関係者からなる愛知大学学術代表団の訪中要望書を届けてもらった。翌昭和四十七年(一九七二)一月、中日友好協会の文言はあったが、代表団派遣については何の言及もない。その後におきた林彪事件の後処理を終えて鄧小平副主席が復活するなど、やや落ち着きを取り戻した感はあるものの、文革は六年目に入り、なお進行中であった。党、政府の高級幹部が追放されるなかで、郭沫若の健在が確認できたことは喜ばしいニュースであった。

同年七月、久曾神昇学長名で就任の挨拶を兼ね学術代表団を来年に派遣したい旨の書簡を中日友好協

会宛に発送した。日中国交正常化を目前にし、鈴木は代表団派遣の準備を急いだ。翌四十八年（一九七三）、中日友好協会宛に年賀状とともに鈴木を団長とする四名の代表団名簿を付した訪中要望書をあらためて出した。すでに日中国交回復が実現し訪中の可能性は高まったと考えたのである。当時はまだ文化大革命をきっかけに分裂した日中友好協会は二つに分かれ、日中交流事業にも混乱が生じたため、今回の要望書は日本中国文化交流協会（中島健蔵理事長）を通して提出された。

同年五月、天津の南開大学から愛知大学学術代表団の訪中を歓迎する旨の電報が届いた。おりから全国的に大学紛争が盛んで愛知大学も例外ではなく、学生との大衆団交、本館封鎖、研究館封鎖や学生自治会執行部派対執行部派の武闘などが繰り返されていたなかでの嬉しいニュースであった。

代表団の派遣に際して、愛知大学が単独で派遣する辞典編纂に関する研究討論を目的としたものであること、経費はすべて刊行会が負担すること、とくに文化大革命中であることに留意して人選をおこなうことなどを決めた。当初鈴木は参加者の範囲を広げて多数の関係者に訪中の機会を提供することを目論んだが、結果的には四名となった。とりわけ内山の不参加は鈴木にとり極めて不本意なものであった。翻意するよう説得に努めたが内山は健康上の理由で参加を固辞したので、鈴木はやむなく同意した。

南開大学は北京大学、上海の復旦大学と並ぶ名門校で、とくに周恩来総理の母校として著名である。国務院科教組（教育部の文革中の名称）からの通達で、この三校が訪問を受け入れ、南開大学が責任校として各校で辞典座談会を開催する体制を組んだものである。

学術代表団は鈴木擇郎を団長とし、池上貞一、中島敏夫、今泉潤太郎の三名を団員とするもので、昭和



四十八年（一九七三）六月十五日出国、七月五日帰国、三週間の日程が組まれた。日中間の直行便は翌年秋からで、一行は羽田空港からBOAC機で香港啓徳空港へ飛び一泊した。翌日鉄道で羅湖にて下車、歩いて小橋を渡り入境手続きをすませ深圳で出迎えの中国国際旅行社員に案内され鉄道で広州へ、駅頭では李何林教授ら南開大学関係者に迎えられた。鈴木教授とほぼ同年輩の李教授は魯迅研究で著名な文学者であり、わざわざ広州まで出張されたことに驚きと感謝の念を禁じ得なかった。同時に、代表団が重視されていることもわかり、責任の重さをいまさらに感じた。李教授は責任者としてその後も我々が出国するまでの全行程を同行された。

代表団一行の詳細は『愛大通信』に譲るが、林彪事件後に実権を握った「四人組」の批林批孔運動や軍管（人民解放軍の管理）下の南開大学の風景をかいま見ることができた。

南開大学における充実した二日間の『中日大辞典』座談会の終了後、愛知大学から南開大学に対し学術交流の提案をおこなった。すなわち、(1)南開大学代表団の来日招請、(2)教員、学生および資料の交換、(3)辞典編集への支援である。鈴木が団長として中国語で挨拶し、提案をおこなうと盛大な拍手が起こった。翌年早々、資料の交換が始まったが、辞典刊行会設置の趣旨である学術交流が全面的に実現するのはこの十年後に南開大学代表団（団長滕維藻<sup>とういそう</sup>学長）が来学する以降である。

## ◆ 編纂処の解散

初版の出版を機におこなわれた編纂処の解散は建物の明け渡しと表裏一体をなしている。

当時、豊橋キャンパスでは教室棟、研究館、図書館など教育、研究関連の建設が相継いだ。事務棟の着工はいつも後回しにされていた。事務用の建物は旧軍隊時代の本館のみで部屋不足は深刻な問題となっており、本館横の編纂処の建物は使い勝手も良く、当初から事務当局に目をつけられてきた。辞典が完成すると同時に建物の明け渡しを催促された。六年前、編集期間の延長を承認する際に完成時には建物を明け渡すことが暗黙の了解事項となっていた。以来、急いで辞典をつくれ、すぐ建物を明け渡せの声がかまびすしくなり、編纂処への風当たりが続いた。辞典を出し建物を明け渡し、逆風も止んだ。心底ほっとしたというのが編集スタッフの心境であり、建物を明け渡してはじめて編集が終わったことを実感した。

編纂処解散の決定に至る過程は淡々としたものである。鈴木意向を受けて辞典刊行会（本間）が了承し、これを大学当局が追認しただけである。評議会からも疑問の声や反対の意見が出なかった。所蔵図書のうち、図書館側が選別したものは「中大辞典文庫」として大学図書館に納められた。今後の増刷に最低必要な図書や編集資料は鈴木、内山、今泉の各研究室に分配し、これ以外は不要となった。用済みの多数の辞典原稿カードはおおかた処分された。

この時は解散がもたらす結果に対する問題意識も、将来の全面改訂すなわち新版編集への考慮も稀薄で

あつたというほか無い。多少でも考慮していたら設備、備品、蔵書、資料やカードなど、一切合切を一時的に他へ移し、保存しておく可能性を追求したであろう。広いキャンパス内のあちこちには旧軍隊の老朽建物が残っており、物置場には事足りていたのである。

編纂処を簡単に解散した理由の一つが編集者らの当時の心身状態にあつたと思われる。辞典の発刊まで、カードの作成、印刷、校正、製本の点検までの作業と、講義や教務などの業務をおこなう日が続いた。眼前の仕事に手一杯で、今後のことを熟考する余裕はなく、いつも焦燥感、切迫感につきまといわれていた。発刊後は辞典の評価や売り上げを気にしない訳はない。

長期にわたる編集をやり遂げ、辞典を完成させた満足感、高揚感とともに、永年の重圧から解放された虚脱感と積年の苦勞で蓄積された疲労が溜まっていた。これが鈴木と内山の健康に深刻な影響を及ぼしていた。

編纂処と辞典の将来について、当時記述された資料は確認できない。来学した際、本間はしばしば鈴木と相談していた。もしも鈴木意向が編纂処維持にあれば、本間は協力し、これを実現したであろう。鈴木本の編纂処を解散する旨を了解して本間は辞典刊行会の承認を取り付けた。

辞典刊行会は本間名誉学長、学長、学部長ならびに鈴木と内山、すべて学内者による役員構成となっていた。解散は最終的に大学評議会により承認された。

昭和四十三年（一九六八）辞典刊行の最中に、総発売元の大安が廃業、破産した。大安の破産は文化大革命と直結した会社内における政治闘争の結果であり、財務上の破綻とは異なる。この背景には以前から

存在していた日中両国共産党の対立関係が文革をきっかけにして敵対関係へと激化していったことにある。中国と密接な関係をもつ団体、組織から個人間にまで敵対関係が深刻となつて暴力行為や傷害事件も多発した。

このため辞典刊行会は債権者として東京地裁でおこなわれた大安破産事件の裁判に関与することとなつた。大安の廃業後、小林社長は株式会社燎原を立ちあげ事業を継続したので、辞典の第二刷は翌年四月、燎原の名で出版された。旧大安の債務も同社が引き継ぎ、後に完済された。

『中日大辭典』は発売以来、幸い世間の好評を得て好調な売れ行きを示していたところ、日中国交回復が実現して中国に対する関心は一段と高くなるとともに中国語学習熱も起こり、この辞典に対する需要がさらに高まつた。発売元は大安から燎原へと替わつたが売れ行きに影響はなく極めて順調であつた。

大手の出版社による出版を断念し、大安を出版、販売元にして自費出版（本間の言葉では自己出版）すると決めたことに、本間、鈴木ら関係者が一抹の不安を持たぬはずがない。

当時、出版物は委託制度と再販制度に支えられ、取次店を通して全国の書店で販売された。大手取次の日販、東販二社がほぼ独占していた。大安や燎原は辞典を全国の書店に配本する手段を持っていない。

このため『中日大辭典』の発売を知り購入したいが、最寄りの本屋で売っていないとの苦情や、店頭で手に取つてみたいなどの要望が大学にも多く寄せられた。事務当局からは大学広報のために辞典を全国の書店に配本せよとの声もあがつた。予測されていたとはいえ、皆もつともなことであり、自費出版の厳しさをいまさらながら思い知らされた。そのなかで発売以後、中国関係新刊書の売れ行きトップに長期にわ

たつて名を連ねたことでは、いささか溜飲を下げた。全国の書店で販売することは関係者の等しく望むところであり、第二版刊行の際に論点となった。

辞典発刊後の業務はすべて中日大辞典刊行会によつて執行された。学内の諸星熊造、木田弥三旺、浅野巧美といった同文書院関係の幹部職員が刊行会の業務を兼務した。大学理事室付きの諸星は本間の指示で辞典刊行会関係の財務を長期にわたつて管理した。作成された辞典損益計算書は每期ごとに辞典刊行会から大学当局に報告された。木田は同文書院華語教員として接收に際して活躍したが、愛知大学創立後は大  
学監事となり、辞典出版費の調達で本間に協力した。浅野は大学創設以来、庶務課長として同文書院関連の事務を担当した。

『中日大辞典』は原稿カードの返還、編集、作成、出版から販売、経理に及ぶまで、すべて東亜同文書院関係者の手を経てなされた。本間の言う自己出版とはこれを指している。

## 資料 6

- 6-1 学術代表団の訪中
  - a 訪中申請
  - b 朝日新聞記事
  - c 愛知大学と中国との新証言
  - d 愛大宛中国日本友好協会からの返信
  - e 訪中申請書(1)(2)

- f 人民日報記事
- 6 | 2 学術代表団の帰国
- a 愛知大学通信
- b 帰国挨拶状(1)(2)(3)
- c NHKテレビ放送用コンテ…愛知の話題「辞典が結ぶ日中友好」

## ◆—中国との絆

それは数奇をきわめた辞典であった。はじめ中国は上海の同文書院に呱呱の声をあげ、十数年にして終戦とともに中国に接収された。書院の教授たちは、おそらく永久に日の目をみないものとおもわれたにちがいない。戦後十年にちかく、その膨大な資料が中国から返還された。そだての親たちのうれしさは想像にあまりある。それよりさらに十年、日本は豊橋の愛知大学で根本的な検討と整理がくわえられ、いまようやく刊行されようとしている。それは実に、日中両国民の心血がそそがれていた。

日中両国は、いわゆる一衣帯水のあいだにありながら、言語系統のまったくちがった民族である。しかも、日本は中国の漢字を吸収し、もっぱら漢字によって意思をつたえようとして、中国の言語そのものに肉薄することをおこたった。こうして中国語の研究はおくれ、中国語の辞典が本格化したのは、きわめて最近のことすぎない。自然、この辞典のごとき膨大なものは、まだあらわれていない。いまやその刊行によって、中国の古今東西にわたるおびただしい語彙は、きわめて容易に検索することができ、

日本の中国語研究に一大利便をくわえることになった。

おもえば、この辞典は、かつて日中両国のあいだに介在して数奇な運命をたどったが、それはやがて両国文化交流の使節たる資格を賦与される所以となった。前後三十余年にわたる編集各位の努力にたいし、ここからなる敬意をささげたいとおもう。

これは初版発売に寄せられた倉石武四郎東京大学名誉教授（中国語学）の「日中文化交流の使節」と題する推薦文である。

辞典カードの返還申請からカードの受け取り、辞典の編集と刊行、贈呈、南開大学における辞典座談会と学術交流の実施にいたる全過程が日中文化交流そのものである。とりわけ同文書院（カードの作成）廃校から戦後の愛知大学創立（カードの返還申請）の時期は、中華民国（カードの接収）から中華人民共和国（カードの返還）への転換期と重なった。そのなかで密接に関わったのが郭沫若、鄭振鐸、康大川、馮乃超、李何林の各氏である。そのおかげで「日中文化交流の使節」としての『中日大辞典』が誕生したと言っても過言ではない。

各氏の略歴を付し、あらためて辞典との関係を明らかにしたい。



◆ 郭沫若氏

一八九二年（清光緒十八）十一月十六日生、一九七八年六月十二日没。四川省樂山出身。本名は開貞。沫若の名は四川すなわち大渡河、岷江、沱江、嘉陵江のうち、大渡河の古名沫水の沫と岷江支流の賀河の古名若水に由来する。詩人、作家、文学者、歴史学者、甲骨学者（鼎堂は号）にして政治家。行、草書に優れた書家。文学作品、学術研究書などの著書多数。

一九一二年（大正二）末に来日し中国人留学生のため開設された第一高等学校予科で日本語を学ぶ。岡山第六高等学校から九州帝大医科へ進み卒業する。しかし六高時代に知りあった成仿吾や東京で留学中の張資平、郁達夫らと交わり、一九二二年に文学団体創造社を結成し活発な文学運動をおこなった。一九二六年国民革命軍の北伐に参加し政治部宣伝科長兼副主任として活躍したが、蒋介石の反共クーデターの後、日本に亡命した。

在日中は中国古代社会や甲骨文字などの研究に専念し『中国史稿』、『甲骨文字研究』などを発表、中央研究院士となる。一九三七年日中戦争が始まると帰国し国民政府軍事委员会政治部第三庁主任として活躍。一九四一年重慶で郭の功績を讃えて開催された大会では、周恩来から「新文化運動の主将」と讃えられた。その後、蒋介石の独裁に反対して職を辞し、政治活動から距離をおき、主に文筆活動を通して反蔣抗日運動を展開した。歴史劇『屈原』や哲学書『十批判書』を発表し活発な著作活動をおこなった。

一九四九年新中国成立後は中国科学院院長、中国文学芸術界聯合会主席、中国全国政治協商會議副主席、中国人民保衛世界和平委員会主席、中日友好協会名誉会長などを歴任した。中国の文化界、学術界を代表する人物であり、とくに戦後は知日派として日中間の国交断絶中において中国側の窓口となった。

辞典との関係は一九四九年辞典原稿カード返還要請の相手を同氏としたことから始まった。一九五七年中国学術代表团団長として訪日の際に、愛知大学訪問の要請に応じて馮乃超副団長を代理として派遣し、辞典編纂を励ました。また一九五八年鈴木が愛知県平和代表团副団長として訪中、接見の際に鈴木から辞典編纂の進捗情況の報告を受けた。一九六六年日中友好市長訪中団団長として本学理事河合陸郎豊橋市長と接見した際、「激濁揚清」の書を揮毫し辞典編纂を激励した。一九六八年『中日大辭典』が刊行され中日友好協会並びに郭沫若名誉会長に贈呈された。一九七三年南開大学の辞典座談会に出席した愛知大学訪中学術代表团（団長鈴木）は北京人民大会堂で郭氏を表敬訪問したことなどが特筆される。

#### ◆ 鄭振鐸氏

一八九八年（清光緒二十四）十二月十九日生、一九五八年十月十七日没。浙江省永嘉県出身。訓詁学者、国文学者、作家、筆名は西諦。蔵書家として著名である。『挿図本中国文学史』、『中国俗文学史』など多数の学術著作と詩集、短編小説集がある。

北京鐵路管理伝習所で学び五四運動に参加、瞿秋白と文学雑誌『新社会』を出す。一九二〇年に茅

盾、胡愈志らと文学研究会を結成し、のちに彼らとともに商務印書館編輯の職につき、雑誌『小説月報』を担当し文学運動をおこなった。また上海大学、燕京大学、清華大学などで教鞭をとり社会運動に参加したが、一九二七年蔣介石の反共クーデター後に渡欧し、英、仏などで中国の古典文学、俗文学などの研究、著述に没頭した。一九三一年満洲事変後に帰国し、商務印書館編輯の職に復帰して『魯迅全集』などを編集出版し、ふたたび燕京大学、清華大学などで教鞭をとった。

一九三七年日中戦争が起ると胡愈志らと上海文化界抗日救亡協会をたちあげ抗日救国、反国民党独裁の運動を展開した。また戦火による善本の流失を防ぐため文献保存同志会をつくり、図書の買い上げを政府に迫り実現させた。日本敗戦前後には雑誌『民主』、『文芸復興』などを発行し、許広平、周建人、李健吾らとともに上海文芸界の代表的人物として活発に平和、民主化運動を展開した。一九四九年新中国成立後は人民政府国家文物局長兼文化部副部长となり中国科学院考古研究所長を兼任し手腕をふるったが、一九五八年中国文化代表团団長として中東訪問の途中に飛行機事故で落命した。

辞典との関係では、戦後南京上海地区における日本の学術文化機関所蔵図書接収の専門委員として同文書院へ視察に赴いたことから始まった。辞典原稿カードの視察に立ち会った鈴木は鄭振鐸に対し「もし事情が許すようになったら、われわれの手でこの辞典を完成させてもらいたい」と口頭で申し入れた。

後にカード返還に際して中国側は「中華民国国立編訳館に接収され……解放後我が国の人民政府に接収された。……カードの件について……関係部門の協力によりさがしだすことができた」と極めて漠然と述べている。これら関係部門が国家出版総署、新華辞書社、商務印書館などを指し、鄭と緊密な関係にあつ

たことは本書第2章に述べたとおりである。

鄭をキーマンとして見る辞典原稿カードの動きは以下のとおりである。一九四五年九月、接收前の視察で来学した鄭は鈴木からカードについての要望を聞く。接收後カードは中華民国国立編訳館が所管。同館は一九四九年十月中華人民共和国成立の後、国家出版総署へ編入、鄭は文化部副部長に就任し、カードは商務印書館へ移管される。一九五〇年新華辞書社設立、同社でカードを利用。一九五一年初辞典カードの調査依頼により、康大川の調査でカードは鄭の手元にあることが判明。一九五二、五三年中国政府部内における審議、鄭も参加か。一九五三年十月愛知大学からカード返還の正式要請。一九五四年四月中国人民保衛世界和平委員会からカード返還の通知。同年九月カード日本に到着。

鄭振鐸氏はカード返還の鍵を握る唯一の人物であった。辞典の出版前に急逝されたことはまことに遺憾である。

#### ◆ 康大川氏

一九一五年生、二〇〇四年没。原籍台湾苗栗人。本名は天順。『孟子』の「順天者存、逆天者亡」からの命名を嫌って順の頁を取り去り川、天の横棒を一つ抜いて大、前後を逆に大川としたという。東京の錦城学園を経て早稲田大学商科を卒業。一九三八年、日中開戦の翌年に帰国し国民政府軍事委員会政治部第三庁（主任郭沫若）文化工作委員会第七処第三科（科長馮乃超）に属し、日本軍兵士への宣伝工作を担当し

た。一九四一年皖南事件後に郭の協力で国民政府軍事委員会政治部第二捕虜收容所（貴州鎮遠和平村）の主任管理員となり、闊達な人柄の康はよく日本軍捕虜の世話をみて皆から慕われた。その後、国民党によって投獄させられたが、郭の援助で一九四六年国共双十協定後に自由を回復し復職、帰国する日本軍捕虜に付き添い上海に出る。一九四九年新中国成立後は日本語翻訳専門家として外文出版社に勤務し中国翻訳工作者協会理事として活動したが、その後、人民政府新聞総署国際新聞局（局長喬冠華）へ転じ日語科長兼人事科長となった。一九五三年雑誌『人民中国』日本語版を立ち上げ、一九六三年より同版編集長となり、その後同社の顧問となる。

康は島田政雄を介して辞典カードと関わった。経緯は以下のとおり。一九四六年上海で康は改造日報社の島田ら日本人記者の援助を担当した。同社は敗戦後上海など各地で引き揚げの配船待ちをしている在華邦人に対する平和、民主、軍国主義反対の思想宣伝のため国民党軍第三軍司令湯恩伯によって設立された新聞社で、社長、理事長、主筆などの幹部は共産党員である。『改造日報』、『改造評論』や叢書などを発行し活発な宣伝活動をおこなったが、国民党の反対によって一年で廃刊となり、島田ら日本人記者は強制帰国させられた。昭和二十五年日中友好協会結成に参加した島田は文化担当理事として、国際新聞局日本語科長となった康の協力を得て新中国の出版物著作権問題を解決したことは第2章で触れた。島田が辞典カードの調査をまず康に依頼し、その結果カードの所在が判明したのである。

辞典との関係は以下のとおり。一九四九年十月新中国政府樹立、康大川は国際新聞局日本語科長。翌年十月日中友好協会設立、本間に協力し内山理事長はカード返還要請の打診。同年末島田理事から康へ調査

依頼。一九五一年康は調査の結果、カードが鄭振鐸文化副部長の手元にあることを突き止める。一九五三年島田に『人民中国』日本語版編集部宛に返還要請状を出すよう連絡。一九五四年四月カードを日本人民へ贈る旨の通知、同年九月天津の塘沽港で康から島田にカードが引き渡された。

◆ 馮乃超氏

一九〇一年（清光緒二十七年）十月十二日生、一九八三年一月没。原籍広東省南海県塩歩区秀水郷、日本生まれ。詩人、作家、文芸評論家、政治家。在日華僑の有力者の横浜興中会主幹の馮鏡如の子。一九二三年名古屋の第八高等学校を卒業、京都帝国大学で哲学、東京帝国大学で美学、美学史を専攻した。一九二六年郭沫若らが組織した創造社の『創造月刊』に詩を発表し同社の同人となった。翌年帰国したのち、李初梨らとともに成仿吾を中心とする後期創造社に参加し『創造月刊』を主宰した。また夏衍と芸術劇社を結成し新劇運動をおこし演劇評論をおこなった。芥川龍之介の小説の翻訳などもある。一九三〇年には魯迅、茅盾、郁達夫、周揚らと左翼作家連盟（左連）を結成した。のち中共中央宣伝部文化工作委員会書記、『紅旗週報』編集者。日中開戦後の国共合作により一九三八年から国民政府軍事委員会政治部第三庁主任郭沫若のもとで文化工作委員会第七処の敵情研究を主とする第三科長として対日宣伝工作に従事した。康大川もここに所属していた。また中華全国文芸界抗敵協会を組織し、周恩来の下で活躍し国共談判における党代表の顧問となる。一九四九年新中国成立後、政府文化教育委員会副秘書長兼人事処処長などを歴任

し、文教、宣伝のほか人事、紀律、検査などの党務について。人柄は誠実で慎み深く、地位名利に甚だ淡泊であった。地下活動で漢奸（のち名誉回復）とされた潘漢年の入党推薦人の立場を崩さなかったこと、かつて魯迅とともに周揚らのセクト主義を批判した馮雪峰（人民文学出版社社長、『文芸報』編集長）が反右派闘争で失脚し死後に名誉回復された件で、馮雪峰に謝罪するよう党宣伝部副部長の周揚に言ったことなどは、その人柄を如実に伝えている。一九五〇年から中山大学副学長として出身地広東省へ出向した。降格同然の異動であったが周恩来の要請に応え欣然として赴いたという。その後はひろく広東省の文化、教育、学術の指導にあたった。一九七五年より北京図書館（現中国国家図書館）顧問の地位にあった。

辞典との関係は、昭和三十年十二月郭沫若団長の代理として来学、辞典編纂を激励して、为中日两国文化交流打好坚实的基础”の書を寄せた。これが愛大と中国との学术交流の嚆矢となった。『馮乃超年譜』に「一九五五年十二月二十五日に帰国、二十八日には上海に戻ったが、毛主席に訪日報告のため郭沫若とともに広州へ呼ばれた」との記述がある。このとき馮が愛知大学の辞典編纂に触れたかどうか不明だが、カードの返還は周恩来総理が決定し最終的に毛沢東主席の承認を得ておこなわれた、とする風説の材料かも知れぬ。また昭和五十三年六月、全国図書館職員友好の翼訪中団に参加して、北京図書館を訪問した本学図書館事務長山下輝夫らが当時同館顧問であった馮と面談した。山下は帰国後『愛知大学通信』に「馮乃超先生に再会」と題して、辞典第二版編纂の進捗状況を報告したとき「鈴木先生はお元気でいらつしやいますか」との言葉に感動したこと、また「その場で前日に亡くなった郭沫若先生のお悔やみを申し上げられなかったことが悔やまれてならぬ」ことを述べている。

ちなみに辞典第三版の編纂に協力された本学中国語講師の馮愛珠女史は馮乃超氏の姪にあたる。

◆ 李何林氏

一九〇四年（清光緒三十）一月三十一日生、一九八八年十一月九日没。本名は竹年。安徽省霍邱県出身。文芸評論家、中国現代文学、魯迅研究者、教育者。一九二〇年阜陽の省立第三師範学校の給費生となり、五四運動の新思想を受け魯迅に心酔する。その後南京の東南大学農学部で生物学を専攻、在学中に五三〇運動を経験し、一九二六年上海で中央政治軍事学校武漢分校に入学、国民革命軍の北伐に参軍し政治部宣傳科に配属された。第一次国共合作崩壊後、一九二七年南昌起義に参加した。のち郷里に帰るが国民党の追及をうけ、名を変えて魯迅の指導する北京の未名社（出版社）に避難した。一九二八年には革命文学論争を活発に展開し『中国文芸論戦』、『魯迅論』を編著、出版した。翌年天津女子師範学院の教師となり、魯迅の『中国小説史略』を講じた。のち太原、済南、北京で教師をしたが、一九三七年日中戦争が始まると重慶に移り『近二十年中国文芸思潮論』を執筆した。一九四二年昆明で中華全国文芸界抗敵協会理事となり、聞一多ぶんいったの雲南省中国民主同盟の文芸工作委員会の活動を兼務して活動した。

一九四六年七月、聞一多が国民党のテロで暗殺され上海に戻り、解放区へ入ることを画策したが実現せず、同年末に台湾省立編訳館館長許寿裳きよじゅじやう（魯迅の友人）をたよって上海を離れ台湾へ渡った。日本統治下の台湾人を国民（中国人）化させるため、台湾省行政長官となった国民党の陳儀ちんぎの要請によって来台した



許寿裳は、この編訳館を拠点に魯迅の思想と作品を学校教育、社会教育の手本にして、台湾の新文化運動を展開した。しかし翌年、二二八事件が起こり陳儀は解任され編訳館も閉鎖された。さらに許が国民党テロに暗殺されたため、李は急ぎ台湾を逃れ、上海、北京、天津、石家荘を経て解放区に入り華北大学の教授となった。新中国成立後は教育部で『中国高校新文学教学大綱』の制定に参加したが、一九五〇年北京師範大学教授に転じ、さらに一九五二年から南開大学中文系主任として勤務した。一九七五年新設の北京魯迅博物館館長兼魯迅研究室主任となり、同館の整備と研究室の基礎をうちたて『魯迅手筆稿全集』、『魯迅研究資料』など編集出版した。早期には魯迅を誹謗中傷する勢力とたたかい、晩年には魯迅を神格化し利用する輩とたたかい、生涯を敬仰魯迅、研究魯迅、宣伝魯迅に捧げたと評される。

辞典との関わり合いは、南開大学における中日大辞典座談会の開催責任者となったことによるものである。李何林教授は広州―上海―天津―北京―西安―上海―広州各地で一、二日間滞在し見学、会見、座談をおえて次へ移動する三週間の全行程を我々に随伴された。高齢の李教授の終始かわらぬ誠実な対応に一同深い感銘をうけた。『李何林先生記念集』中の年譜一九七三年の項に「六月南開大学に來た日本愛知大  
学訪華代表団を接待した」との記述がみえる。

#### 資料7

7-1 中国との絆

a 郭沫若(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)

e	d	c	b
李何林	馮乃超	康大川	鄭振鐸
	(1)	(1)	(1)
	(2)	(2)	(2)
	(3)	(3)	
	(4)	(4)	
	(5)	(5)	

## ◆ 第二版、第三版ほか

昭和六十一年（一九八六）五月、第二版出版記念会が中国国家教育委員会への辞典贈呈式を兼ねて名古屋駅前都ホテルにおいて開催された。浜田稔学長の挨拶に続き編集委員長である今泉から編集経過報告がおこなわれた。参加者二〇〇人を超す盛会であったが、壇上に鈴木擇郎編集主幹の姿は見えず御遺族の胸に掲げられた遺影による出席であった。また静養中の本間喜一名誉学長に代わり御息女が参列された。

これより十一年前の昭和五十年（一九七五）四月、辞典編纂処が七年ぶりに再開された。初版出版後も改訂への意欲はいやまし、前年の三月、胃切除の大患を克服した鈴木は大学へ依願退職を申し出た。定年制施行前、教授の職を辞してまで辞書編集に専念する決意は並々ならぬものがあつた。辞典は好評裡に四刷が進行中で、すでに刊行諸経費の回収は達成され利益を生じるものとなっていた。辞典編纂はお荷物「の金食い虫」は、いまや「大学の学術上の成果」として囃される存在となった。ゆえに鈴木の申し出は大学にとり「渡りに船」で、早々と大学評議会で承認された。鈴木「の信念と情熱から出た辞典改訂の申し出

は大学当局にとって歓迎すべきものであったといえる。またかねがね辞典刊行会から内示を受けていた印税について鈴木は著作権放棄の旨を本間に伝えた。ちなみに持ち分は鈴木三分の一、内山正夫三分の一、今泉と張祿澤三分の一とされ、印税は昭和四十六年より十五年間の出版部数×定価の三%、初版のみに支払うというものであった。

再開された編纂所の位置づけは従前と一変した。今までは辞典刊行会の下に置かれていたが新規により編纂所と改まり大学直属の研究所並みの一組織とされた。すでに私大経常費等の助成が実施されて大学会計基準も見直されており、刊行会による辞典関係の経理も大学会計課に移されていた。辞典の編纂と経理を失った刊行会は以来有名無実の存在となっていく。

新しい編纂所は豊橋キャンパスの旧本館一階西ウイングの端（もとの国際問題研究所）に置かれた。処分されたもとの備品、図書資料などで回収可能なものを調達し、新たな備品類の搬入を急いだ。

今回は現行版の誤植訂正とくに文化大革命関連語彙の点検、増補が当面の目的である。当初鈴木は最新の清刷に直接朱を入れていった。進むにつれて各頁が赤一色となってしまう、従来の原稿カード方式に戻した。進行中の初版四刷の編集作業は今泉が担当しておこなった。

遅れて新规定に基づく中日大辞典編纂所が編集主幹に鈴木、所長兼編集委員長に今泉、所員兼編集委員に陶山信男、荒川清秀、森博達（のち白井啓介ら）により発足した。初版時と同じく中国語専任教員は全員授業外に辞典編纂に協力する方式で、手当てもつけない点も変わらなかった。今回、所員がすべて同文書院以外の出身者となった点について特に留意することなく、鈴木を中心に今泉が補佐する形で第二版の

編集作業が始まった。高臨渡、のちに黄異の両客員教授がインフォーマントとして協力された。翌年には編纂事務嘱託松田文美子が配属され一応の態勢が整った。夏場は窓を全開し肌シャツ姿、真冬は達磨ストーブで暖を取る鈴木の有様は初版編集時と変わらなかった。

同年八月、同文書院以来鈴木と辞典編集の苦労をともにしてきた内山が五十九歳で不帰の客となった。初版出版後はことのほか健康に留意しつつ授業に専念し、今回の改訂版編集にも参加しなかった。入院わずか二十日で急逝したことに関係者はみな衝撃をうけた。「強い正義感、責任感を以って世に処すれば、憤りを感じずることは必至であるが、君は憤りを内におさえて行動に発することなく、責任はいささかなりとも、尽くさざるところあらんことを、これ恐れていた」、「己を持するに極めて厳であり、これが健康に影響したのであろう」。内山の人となりをよく識る鈴木の追悼の言葉である。

翌昭和五十一年（一九七六）に愛知大学は創立三十周年を迎えた。中国では一月に周恩来首相、九月に毛沢東主席が相次いで逝去し、権勢を振るっていた「四人組」が一掃された。翌年には鄧小平副主席が復活し十年間続いた「無産階級文化大革命」が収束した。あらたに改革開放政策が始まった。一九八〇年代に入り辞典関係者待望の中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編『現代漢語詞典』第一版が公刊され、『字源』、『辞海』の修訂本など辞典類をはじめ多種多様な参考図書も次々と出版され入手可能となった。初版編集時とは様変わりし、参考となる良質な資料の溢れるなかで編集をおこなう時代となった。第二版の充実はこれら中国学術の成果に依るところ大である。

翌年秋、編集を進める鈴木に瑞宝中綬章が授与されて関係者による叙勲祝賀会が開催された。本間は席

上「同文書院廃校、引き揚げ時の献身的な行為、愛大設立への寄与、さらに『中日大辞典』の編纂は歴史に残るもので、日中の文化交流に果たす役割はいかに高く評価してもしすぎるものではない」と鈴木を称賛した。本間は第一線を退き名誉学長となつて久しいが、来校時には辞典編纂所を訪ね鈴木と懇談するのが常であつた。この後も鈴木を中心に辞典原稿カードの点検、整理や新語の収集など編集作業は順調に行した。

昭和五十六年（一九八一）一月、辞典編纂に情熱をかけた鈴木は八十三歳の生涯を終えた。死の二日前、意識朦朧となり病室の天井を指し「漢字がいっぱい書いてある」と言った、いかにも父らしい最後であつたとご子息鈴木康雄氏（書院46期・愛大旧5期）は回想している。原稿カードの大半に鈴木の特筆の跡を見ることができた。奇しくも編集再開後に書かれた「中日大辞典の思い出」中の「増改訂の一応の完了予定は昭和五十六年である」との言葉が予言となつた。この頃、初版増刷は七次となつた。

編集主幹は余人を以て代え難く、編集委員会は残された未処理の原稿カードの完成を急いだ。あらたに辞典編纂専任の中国人囑託として前北京農業機械化学院教授黄志明氏を迎えて編集作業は大いに進捗した。ちなみに、大学間学术交流が始まり北京語言学院や南開大学から交換教員が赴任し、日常的に協力を得るのは第三版の編集の時期である。

原稿カードの完成をいそぐ折から、大学創立四十周年記念事業項目として新版の出版が決定し、これに伴い辞典刊行会が久方ぶりに開催された。名のみ組織とはいへ新版の出版について辞典刊行会（本間）を無視することはできない。刊行会評議員会の最重要課題は出版社をどこにするか、すなわち現在の株式会社

社燎原を変更するかどうかであった。欠席の本間名誉学長に代わり鈴木の没後、唯一人の同文書院関係者となった池上教授が出席し、初版発行に寄与した同社小林実弥社長の功績を縷々述べ、変更する必要のない旨主張した。辞典編纂所側は今泉所長が出席し専門的見地から参考意見を述べた。審議の結果、事務当局が推した、辞典を全国の書店に配本し得る大出版社であり、『諸橋大漢和辞典』で著名な大修館書店と契約することに決した。また同時に印刷と製本はCTS（コンピュータ印刷）の凸版印刷株式会社が決まった。

昭和六十一年（一九八六）二月、大学創立四十周年に花を添えて第二版が発行された。しかし翌年二月に急遽これを絶版として増訂第二版を出した。この経緯について詳細は資料8-2d「中日大辞典の編纂②」に譲る。なお発行者を愛知大学中日大辞典編纂所としていない点は第三版で訂正された。

印刷には三年かかった。凸版印刷のCTS印刷は優れ物で、とくに頁数と行入りぎょうりの日本語索引が自動的に作成されたのは、このお蔭である。また我が国で簡化漢字のすべてを使用した中日辞典は『中日大辞典』増訂第二版を嚆矢とする。すでに同社は多数の簡化漢字を保有していたが、不足する活字の製作費は同社が負担された。

大修館書店により増訂版発売広告が朝日、毎日、読売三全国紙に掲載され、全国の有名書店で一斉に発売されたことは愛知大学関係者にとって何よりの喜びであった。初版の三割増の二八〇〇頁となり、片手で扱うにはやや重い。ぶ厚くなった増訂版第二版は「小さな大辞典」と揶揄された。

翌年五月、増訂第二版が出版されたのを見届けたように本間名誉学長が九十六歳の天寿を全うされた。縁あって終生この辞典の編集に関わり本間、鈴木両先生と身近に接した者として、万感の思いを禁じ得ない。

文化大革命前後および改革開放政策以後の語彙が多数収録された増訂第二版は中国を知る辞書としてあらためて全国的に認知されるに至った。また今回の編集も学内外から多くの協力を得た。とくに初版の一愛用者として前名古屋市立大学薬学部教授稲垣勲氏は専門知識を提供され、そのお蔭で中国医学方面の語彙に対する信頼度は揺るぎないものとなった。同様に浜田国貞氏から辞典の表記に関して多岐にわたる指摘を得た。印刷と校正には三年費やした。この段階では編纂事務囑託の加藤寛昭氏、影山裕子氏の協力が大きく、さらに繁忙期には大学図書館から中山欽司氏の助勢を得て乗り切った。大修館書店編集部森田六朗氏の協力も大きかった。とりわけ各書店から絶版を回収し増訂第二版を再配本したため多大のご迷惑をおかけした。大学に交換を申し出られたものも相当あったが、なんとか急場を凌げたのはひとえに大修館書店のお蔭である。

第二版の刊行即第三版の編集開始である。この頃、国際問題研究所で『中国政経用語辞典』の編集を担当した近田尚己氏が研究員として編集陣に加わった。また後に加わった山田克利氏により凡例中の略語と記号の整理、統合がおこなわれた。

かねて懸案の辞典編集を主とする中国語教員の公募を初めて実施し那須雅之氏を迎えたのもこの頃である。今後の辞典編纂の持続的な態勢を考慮してなされた措置であった。しかしその後、辞典編集と授業回数をめぐる問題に端を発し事態が紛糾し、更に別の要因も加わったあげく、まことに遺憾であるがこの人は破綻に終わった。

この頃、辞典編纂専任の中国人囑託の人事枠が認められて、南開大学の王華馥教授、同夫人丁愛菊女史、



劉叔新教授、また北京語言大学の劉青然教授および中国人民大学の李宗惠教授らを相前後して長、短期で迎え、各専門分野での協力を得ることができた。

昭和六十三年（一九八八）、名古屋キャンパス（三好）建設に伴い、かねてから問題とされていた大学の将来計画について全学的に議論が活発となった。学内の各組織にも各々の将来計画についての検討と報告が求められた。平成に入り、これらを集約して愛知大学基本計画構想、基本計画、実施計画が次々と発表され全学的に検討がなされた。議論の深化とともにやがて「二十一世紀を展望する愛知大学基本計画」が発表された。以後これをめぐる議論のなかで最終的に教養部廃止、学部再編、新学部設置の方向がほぼ定まった。その後、教員の配置と各自の所属が具体的に検討され、今後どの学部に所属するかは最終的には各自の判断に委ねられた。所属の問題と切り離して辞典編纂所の将来計画を論ずるのは無意味であり、不可能である。ゆえに眼前の急務である辞典原稿カードの完成までの範囲内で、編纂所の将来問題に関する報告書を作成し大学当局へ提出した。後に名古屋キャンパスにおける現代中国学部新設の方向が定まり、同学部所属の中国語専任教員により編纂所を構成することに決した。

#### ◆ 編纂所の諸活動

ここで話題をかえ辞典編纂所が関与した編集以外の行事について述べておく。

はじめに、昭和三十年（一九五五）初版の編集が始まった頃、読書週間にちなみ豊橋市立図書館からの

依頼で大学図書館、辞典編纂処蔵書の漢籍字典、中国語辞典類二、三十点を鈴木 of 解説を附して貸し出した。隣接する市公会堂とともに豊橋空襲の戦火を免れた市立図書館は当時、豊橋市民の文化的オアシスとして愛され、この辞書展示会は一カ月ほど開催され好評を得た。

また、昭和六十一年（一九八六）十一月、第二版刊行の記念行事として日中国際シンポジウム「二十一世紀の日中関係に向けて」が愛知大学主催で名古屋電気文化会館において開催された。当初は北京で中国人学生日本語弁論大会、名古屋で日本人学生中国語弁論大会と両国大学生によるシンポジウムの開催を計画したが実施に至らず、これに代わるものとしておこなわれた。

またこの頃、通産省出身の日中人材交流協会青木光利事務局長（愛大4期）から要請を受け、愛知県下の企業で実習を終えて帰国する中国人実習生の終業式として、中日大辞典賞日本語弁論大会を主催した。編纂所の名古屋キャンパス（三好）移転までの十年間、毎年実施され、約二百名の実習生が愛知大学で修業式を終えた。

また平成元年（一九八九）、協定校の上海外国語大学王宏教授らが実施する国際協力基金助成の「日本語中国語対照研究」に協力した。同年八月に王教授ら三名が来日し調査が実施された。ちなみに王氏は東亜同文書院（44期）を卒業し、解放後に上海外大教授として中国の日本語教育界で永く指導的役割を担い活躍された人物である。

いま一つ、『中日大辞典』の漢語版すなわち日本語の部分を中国語に翻訳した中国人向けの中中辞典をめぐる話を紹介する。

平成四年（一九九二）十月、中国三環出版社と海南出版社の日本代理店である日中新世紀開発株式会社から大修館書店を経て『中日大辭典』漢語版を出版したい旨の提案があった。両社は海南省最大の出版社で『現代漢語大詞典』、『新現代漢語詞典』、『語言大典』など大型辞書二十余点、年間出版物四〇〇余点、売上げ全国第六位であり、また同社の高級編輯王同億氏は前記の辞典や『ウェブスター大辭典』の漢語版『英漢辭海』、『漢日科技詞彙大全』などを編集した専門家云々の自己紹介があった。おつて王氏から漢語版出版の趣意書と『中日大辭典』本文の第一、二頁の漢語訳の見本刷りが届けられた。契約すれば即刻同社の翻譯陣を動員し短期間で漢語版を完成できる旨が伝えられ、早急に返事が欲しいとの催促である。編纂所は大学当局の見解、大修館書店の意見を踏まえたうえ慎重に検討したのち、翌年初に契約しない旨を通知した。

さて以下が本題である。その頃、中国の辞書学専門誌の『辞書研究』誌上で王同億主編の前記の辞典などには重大な剽窃、誤謬が多々見受けられると指弾する論文が次々と発表された。なかでも著名な言語学者の呂叔湘氏は同誌に一文を載せ王氏のでたらめ加減を紹介している。すなわち「海南出版社が一九九三年九月北京で開催した辞典編集シンポジウムにおいて王氏は『中国社会科学院語言研究所出版の『現代漢語詞典』は日本から導入したものであり、日本愛知大学中日大辭典編纂処が一九六四年に出版した『中日大辭典』の復刻である』と内幕を暴露した」との『民政之声報』掲載記事を引用し「私（呂叔湘氏を指す）が主編した『現代漢語詞典』は一九六〇年に試印本、一九六五年に試用本を出版している、ゆえに王氏は前後を取り違えている」とからかい気味に指摘し、このフェイクニュースを一笑に付した。

いかなる理由で王氏が『現代漢語詞典』の種本は愛大の『中日大辭典』だ」と噴飯物の与太話を公開の席で語ったのか見当もつかない。ただただ苦笑するのみであるが、いささか複雑な思いがある。

王氏と出版社はその後、北京中級法院から著作権侵害で有罪判決を受け、さらに『新世紀現代漢語詞典』は販売停止、『高級現代漢語大詞典』は差し押さえ処分を受けた。いわゆる「王同億現象」はこれで消滅したが、何処も同じ、辞書の粗製濫造は後を断たぬようである。閑話休題。

平成八年（一九九六）、大学は創立五十周年を迎え、翌年四月には名古屋キャンパス（三好市）に現代中国学部が開設された。これをうけて同学部所属の中国語教員によって構成されることとなった辞典編纂所も、移転することとなった。校内での部屋替えとは違って他地への移転であり長期の移転準備を要した。平成十三年（二〇〇一）つつがなく移転が完了したのは、この間長期にわたり辞典編纂事務を担当された草場明子氏の協力のお蔭である。今回も移転に伴い相当多数の資料が不要とされ、適宜処分された。この頃、増訂第二版は七刷を重ねた。

中日大辞典編纂所は名古屋キャンパスの現代中国学部棟三階に開設され、同学部所属中国語教員による構成となった。あらたに編纂所長兼新版編集委員長安部悟、所員兼編集委員藤森猛、吉川剛および編集主幹として今泉が任命され、前田克彦研究員のほか編集事務員を置いた。翌年、定年退職後編纂所専任嘱託となった今泉とあらたに編集委員として迎えた前西安交通大学教授顧明耀氏により、新版の原稿カードの最終点検が始まった。

時代はすでにA Iの急激な発展により電子辞書の進化もまた著しく、これを避けて通れなくなった。こ

の頃、大修館書店から電子辞書製作の提案があり、これを受け入れることになった。従来の著作者―出版社（印刷・製本・販売）に介在して機器メーカーが入ることや、デジタル化に伴う技術上の問題など新たな課題はすべて大修館書店編集部黒崎昌行氏の協力を得て解決された。平成十八年（二〇〇六）に増訂第二版搭載のキヤノン電子辞書が発売された。膨大な積載能力をもつ電子辞書にとって『中日大辞典』はその一部分に過ぎない。辞書の「紙から電子化へ」の問題を機に、編纂所の将来と辞典の在り方に対し安部所長を中心として本格的な検討が始まった。

第三版は平成十九年（二〇〇七）ようやく印刷が始まった。今回の編集も学内外から多くの協力を得た。特に三田良信氏（書院40期）からはたびたび懇篤な助言をいただいた。また松山昭治氏（46期・愛大旧3期）は長期にわたり新語の収集に協力された。また後藤峰春氏（愛大院修、復旦大院博）は貴重な資料を提供されたほか、多数の書籍を現代中国学部へ寄贈された。また編集事務の小川朋子氏、村司香子氏は最終段階における印刷、校正業務を迅速に処理された。このほか大修館書店の手配により船越國昭氏、竹村光葉氏が再校、日本語索引作成に協力された。今回は中国人学生の孫焱さんらの協力を得た。

平成二十二年（二〇一〇）三月、ようやく第三版が出版された。大学の創立六十周年に合わせ完成を期したが遺憾ながら四年遅れの出版となった。出版記念会は同年三月六日午後、愛知大学車道コンベンションホールで開催され、佐藤元彦学長の挨拶に続き、今泉編集主幹の「中日大辞典の歩み」と題する講演がおこなわれた。その後、同窓生有志主催の祝賀会が開催された。翌年一月、第三版の出版に対して第十七回東亜同文書院記念基金会記念賞が辞典編纂所に贈られた。これを記念し編纂所は今泉編集主幹の「中日

大辞典の歴史」、顧明耀編集委員の「中日大辞典について」の講演会を開催した。

第三版における辞典構成上の変更点は親字の配列方式を「分項」としたことである。初版、二版は親字の「集中」としたが、これは当時『同音字典』に依拠したものであった。中国では後に親字の「分項」が確立したので第三版に取り入れた。『中日大辞典』としては重大な変更である。また略号、記号を整理、統合した。なお第三版についての詳細は資料8-4b(1)「第三版の編集を終えて」に譲る。

平成二十四年(二〇一二)四月、名古屋駅に隣接する笹島地区に開設されたのが名実ともに愛知大学名古屋キャンパスであり、新しい中日大辞典編纂所の出発である。編纂所オンラインジャーナル『日中語彙研究』(年刊・電子版)の創刊と『中日大辞典』を継承する電子版『中国語彙データベース』の立ち上げ予告はその宣言である。安部編纂所長は『日中語彙研究』刊行にあたって「と題し『現在の組織のあり方を大幅に見直し、これまでの辞書編纂の技術と伝統を活かしつつ、更なる発展を目指して新たなスタートを切ることとなった』と述べている。辞典の電子化を見据えてあらたに研究員として齊藤正高氏を迎えた。秋の叙勲で今泉は長年の辞典編纂に対し瑞宝中綬章を受けた。

平成三十年(二〇一八)十一月、名古屋キャンパス本館において中日大辞典発刊五十周年記念講演会「中日大辞典 愛知大学の遺産から人類の遺産へ」が開催され、これを記念して中国教育国際交流協会へ第三版一〇〇〇冊が贈呈された。川井伸一学長の挨拶ののち、今泉前編集主幹の「编者から見る『中日大辞典』」、顧明耀前編纂所員の「中国人の目で見えた『中日大辞典』」、齊藤正高編纂所研究員の『中日大辞典データベースの機能』と題する講演がおこなわれた。講演内容は『日中語彙研究』第八号に掲載された。

令和二年（二〇二〇）三月、待望の「中国語語彙データベース」が公開された。増訂第二版および第三版所載の中国語彙二十八万、日本語積義三十八万、例文二〇万総計八十六万項目を有している。機能的には、HSKの重要度による語彙検索ができること、日本語検索ができること、新語登録が容易であることなど利便性が極めて高い。編纂所はこれを記念して、中国語コースを持つ全国二六六の高校へ第三版を贈呈した。

愛知大学とともに『中日大辞典』もまた昭和、平成、令和とほぼ一世紀に近い編纂の歴史に新たな一頁を加えていく。

## 資料 8

- 8-1 編纂所再開と改訂版編集
  - a 編纂所の再開
  - b 改訂版の編集
- 8-2 第2版の出版
  - a 第2版序文
  - b 出版記念会・贈呈式(1)(2)(3)(4)
  - c 関連記事(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)
  - d 中日大辞典の編纂②

- 8 | 8 曹全碑
- 8 | 7
  - a 説明・案内(1)(2)
  - b パンフ類(1)(2)(3)
- 8 | 6
  - a 中日大辞典、辞典編纂所説明・案内・パンフ
  - b 中日大辞典寄贈(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)(11)(12)(13)
- 8 | 5
  - a 米国における中日大辞典(1)(2)
  - b ピンポン外交と中日大辞典(1)(2)(3)(4)
  - d 関連記事(1)(2)(3)(4)
- 8 | 4
  - a 第3版の出版
  - b 第3版の刊行(1)(2)(3)(4)(5)(6)
  - c 書評
  - d 関連記事(1)(2)(3)
- 8 | 3
  - a 体制と運営(1)(2)(3)(4)
  - b 新版の編集(1)(2)(3)
  - c 書信
  - d 関連記事(1)(2)(3)
  - e 書評(1)(2)(3)(4)(5)
  - f 関連記事(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)



◆—あ—がき

“資料による”としながら、肝心の資料は多量のため本書への収録がかなわず、各章の末尾に目次のみを掲げることにした。資料はすべてウェブサイトで公開しているので、お手数ながら、奥付上部のQRコードよりアクセスして閲覧いただけると幸いである。

**今泉潤太郎** (いまいずみ じゅんたろう)

1932年生まれ。愛知大学名誉教授。専門：中国語学  
1955年愛知大学文学部卒業、同教養部講師を経て教授、のち現代中国学部の設置に伴い同教授となる。当初より中日大辞典の編集に携わり、1975年辞典編纂所長・第2版編集委員長、2003年第3版編集主幹を務めた。現在大阪府在住。



<https://leo.aichi-u.ac.jp/~jiten/booklet.html>

---

## 資料による中日大辞典編纂所の歴史

---

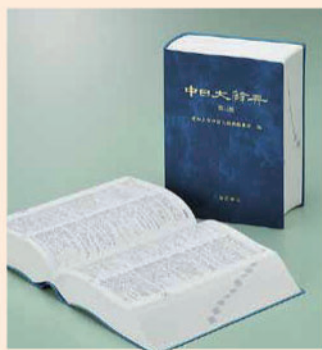
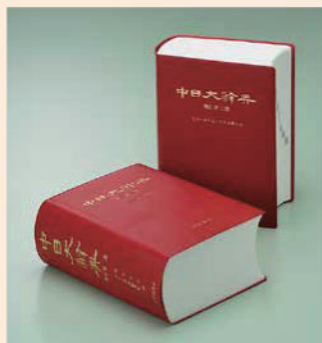
2025年3月31日発行

著者 今泉潤太郎 ©

発行 愛知大学中日大辞典編纂所  
名古屋市中村区平池町4-60-6 〒453-8777  
Tel. 052-564-6122 Fax. 052-564-6222  
<http://leo.aichi-u.ac.jp/~jiten/>

組版 株式会社あるむ

---



資料による中日大辞典編纂所の歴史